

西域史上の新研究(第四回)

白鳥庫吉

大月氏考 三

余輩が前號に於いて論證せし如く、魏志^{卷三}所載の西戎傳に見えたる渴石國は今の *Fargh* *Turgen*なるべければ、*Kas* 國が三國時代に存立せしは確かなり。此名稱は後漢書の西域傳に見えざれど、紀元百五十年頃に生存せし *Ptolemaeus* の地理書に記されたる *Casata* が渴石なるに誤なくんば、此國は既に後漢時代に存在せしなり。又宋雲が神龜二年即ち紀元五百十九年に漢盤陀に至れる時その國王は始祖十三世の孫なりと云而して此王家は必ず葛沙氏なるべければ、*Kas* 國の名が葛沙氏より起れりとせば、此國は後漢以前に在るべしとも思はれず。然れどもまた此王家の姓は還てその國名より出てたりとも考へらるゝが故に、若しも *Herodotos* に見えたる *Caspi* 國が *Ptolemaeus* の *Kasia* 國と同一なりと證明せられんには、*Cas* 國の建設は更に上代に在りしことゝなるべし。 *Herodotos* が波斯王 *Darius* の太守管域を記せる處に、*Caspi* の名は二個處に擧げらる。即ち其一是第十五管域に屬し、*Saca* 人と共に二百五十 *talents* を納め、其二是第十一管域に屬し、*Pasiae* 人 *Panthimathi* 人 *Darinae* 人と共に二百五十 *talents* を納めたるもの是なり (*Thalia*. 95 92)。而して第十一管域の *Caspi* 人は *Curus* 河口の南に據りて、裏

海の沿岸に住し、裏海を Caspi 海と稱するは蓋し此民族の名に起りしなり。又 Pinus 及び Sijabon も此民族を同方面に置き、Ptolemaeus は之を Curus 河と Araxes 河との間に定めたれば、此 Caspi 人は裏海の西南岸に住せしなり。而して此民族の東方に於いて、Parthia 人、Chorasania 人、Sogdiana 人及び Aria 人は第十六管域を構成し、Bactria より Seglos に至る一帯の地は第十二管域を構成し、而して裏海と Saca 人との間には Massagetae 人據れりと云へば、第十五管域に屬せる Caspi 人が裏海の西南岸に住せる同名の民族にあらざりしは明白なり。而も此民族が今の露領 Turkestan に包容せらるゝ Sogdiana、Bactria、Chorasania など、連絡せられずして、還て Saca 人と共に一管域を爲せるを見れば、此の民族が Darius 王の全領土の中、東方極遠の地に偏在せしを推知べし。然れどもその的確なる方位に關しては、古來議論區々にして未だ一定せず。Rawlinson 氏は或る論者が之れを Casia 或は Caspeira の誤寫ならんと言へるに對して、Casia の名は初めて Ptolemaeus に見え、その住地は西藏の東部に位し、支那と隣接したる處なるべければ、波斯の版圖が此の如く東方に延長せりとは思はれず。又 Caspeira 即ち Cashmere は Casia に比しては波斯に近けれど、此國が Saca と同一管域を爲せりとは考へられず。されば Caspi の名は本文の儘にして思考するを穩當とす。想ふに Casia 人の中その本地より西方に移りて、Ghilan、Mazenderan に據れるものは、第十一管域に屬し、又その一部の Arya 民族の原地附近に留まれるものは、第十五管域に編入せられしなるべけれど、その方位は明かならずとなすべし (Herodotus, IV, pp. 203-204)。然るに Rennel 氏は之を Ptolemaeus に見えたる Casia と同名

らとして、今の *Kasgar* に擬し (Geographical System of Herodotus, p. 302) Tomaschek 氏は *Sogdiana* の古地圖に於いて之を Oxus 河の源頭に標示せり。(Centralasiatische Studien, I.) 此の如く *Caspi* の方位に關して議論の一致せざるは畢竟今の *Tasikungan* が上代に於いて *Kas* と呼ばれしを知らざるが故のみ。Darius 王の全版圖の極東部に於いて *Saca* と共に一管域を爲し得べきの地は今の *Tasikungan* 即ち上代の *Kas* なるべしを故に Herodotos の *Caspi* に擬し Ptolemaeus の *Casia* なるべし。

既に前號に於いて詳説せる如く Ptolemaeus の *Casia* は漢土の記録に見えたる伽舍、奇沙、渴石、渴又と同名なれば此稱呼に誤なきは勿論なれど Herodotos の *Caspi* に於いては之に該當する呼稱の他に傳はりしを聞かず。されば或る論者が之を以て *Casjia* の誤寫なりと爲すも強ちにその理なきにあらねど此訂正が果して其當を得たるか否かに就いては更に一考を要す。而て *Tasikungan* 即ち *Sari-kol* の地が *Casia* と呼ばれしは此處に *kas* 石を産出せるが故なるべし。*kas* とは *Turk* 語にて玉石を *カス* 名なるが波斯語にては之を *yasp* *yasf* *Arabia* 語にては *yasb* *yast* *yashb* *Hebrew* 語にては *yāshphāh* キリマンヤ語にては *zāstis* 英語にては *jasper* といふ。佛國の東洋學者 Remusat 氏は此等の言を以て何れも *Turk* 語 *kas* の轉訛なりと爲せり。(His-toire de la ville de Khotan) *kas* が轉じて *jas* となるは固より自然なれば *yāshphēh* *yaspi* の *yas* は *kas* の轉訛ならんがその末尾に現はる *phēh* *pi* *b* がまた *kas* より變化せりとは思はれず。察するに葱嶺以西の西域諸國にて玉を *yāshphēh* *yaspi* と呼ばば *kaspi* の轉じて此寶石が元と *Caspi*

國より傳はりしが故なるべし。例へば紅石は Badakhsan に出でしが故に、その産地の名を取て之を *balak* (即ち *badakhs*) と呼ぶが如き類ならん。若しも此考察に誤なしとせば Herodotos の Caspi は Casia の誤寫にあらざして、Casia 國はまた實に Caspi 國とも稱せられしなり。而して Caspi の頭綴音 Cas は kas に當る言なるべきが、その末綴音 s は如何に解釋せらるべきか。

余輩が嘗て烏孫考に述べたる如く、此國の貴人の名には某靡と稱するもの多し。例へば難兜靡、獵驕靡、泥靡、翁歸靡、元貴靡、星靡、雌栗靡、安犁靡の如き即ち是なり。此靡は pi と音じ Turk 語にて君長の義なり。西域聞見録^{三卷}によれば哈薩克 (Kizil Kasak) 及び布魯特 (Kara Kizil) にては其君を號して比 (pi) と曰ひ又 Badagoff 氏の Turk 字典を見るに、Kizil 語にては王或は主人を *bi* とし、Altai 語にては *pii* とし、(Srivitelnyj slovar Turcko-Tatarskikh Narečij pp. 263, 298)。烏孫語の靡は正しくこの比 *bi* *pii* の對音にて王或君主の義なるべければ烏孫語は Turk 語族の中に於て Kizil 語系に屬するを知るべく、而して烏孫の東方及び東方に位置せし突厥回紇等の方語にては之を *bäg* とし、ひ絶えて *bi* と言はざれば、Kizil 族の天山葱嶺の間に據れるは、實に悠遠なりと謂ふべし。因て案するに、Caspi 國の末音 s は上の *bi* 或は *pii* に當る Turk 語にて、Caspi 國とは即ち Cas 王國の義にて、此國が東晋時代に知られたる伽舍羅遊 (Kasradja) と同義の稱呼なり。伽舍羅遊の國號は梵語が Taskungan に傳はりし後に起れるものなれば、その以前は専ら Turk 語に従つて Kas-pi (Caspi) 國と呼ばれしならん。Tasikungan 即ち Sari-kol 地方は現時に於けるが如く、Herodotos の時に於ても亦 Iran 人の本土

なりしと思はるゝに、その國號及び王家の姓氏がTürk語にて解釋せらるゝは甚だ怪むべきに似たれど、而も此國が當時Türk人に支配せられたるか、但しは其隣近に住居せしTürk人の言語を借用せりと見んに、この事決して解し難からず。之を要するに、Caspia國或はCaspia國の稱呼がTürk語なるは、即ちTashkurganの近傍にTürk人の據りしを暗示するものなり。然らば此民族は果して當時何處に據れるか。この問題たる一見本論に關係なきが如く思はれんが、その實大月氏の種類問題にも關聯することなれば、余輩は此の機會を利用して、廣く中央亞細亞に據れる古代民族の種類を論究し、以て間接に大月氏の性質を考覈せんと欲す。

葱嶺を中心として其の西方に位する河間の地及びその南方に當れる印度が太古よりArya種²⁾の占領する所となりしは、既に學界の定論にして亦疑議の存すべきなれば、Türk人の故地は必ず其の東方或は北方に求めざるべからず。而して葱嶺の東方に連接するは支那領のTurkistanなれば先づ此地の土人より説き始むべし。英人Robert Shaw氏は紀元千八百六十五年に新疆省の西部に探検を行ひ、土人の骨格に就いて精細なる觀察を遂げたり。今試に同氏の所説を摘載せんに、東部Turkistanの住民は決して純然たるTatar種といふべからず。例へばYarkand人の如きが游牧を業とするKingiz人に類せざるは勿論にして、又之を稍、開明に進めるUzbek人と較ぶるも、尙そのArya種に類似するを看取すべし。彼等の身體は瘦せて高く、顔貌は寧ろ面長の方にて、鼻梁は直く鬚髯多し。之に反してKingiz人は體

軀矮小にして眼目は細狭なり。顴骨は突起して厚鼻低く座し、顔面に毛髪の少きこと漢人にも過ぎたり。Turk種の中に於いてUzbek人は概して鬚髻多き方なれど、尙ほ口角顯邊に疎髻を留むるのみ。Kokand、Bokhara等に居住するUzbek人に稍、鬚髻多きは畢竟Arya種たるFadjik人と雜婚したる結果なり。之を要するに、現今のYarkand人はKirgizの如き純粹のTatar種にもあらず、又Uzbek人の如きArya化したるTatar種にもあらずれば、寧ろ之をTatar化したるArya種と稱するを穩當とすべしと(Visits to High Tertiary Yarkand and Kashghar. pp. 21-25)。次にGrenard氏がFarin盆地に住する民族の種類に關する意見を紹介せんに「Farin盆地の民族が單純にあらずして複雑なるは、其體格を瞥見して直に看取し得べき事實なり。固り個人を取て之を見れば、その體格の一樣ならざるは勿論なれど、概して之をいへば、その間に自ら普通性の存するを認むべし。其身長は概して高く、時に一七〇米突に達する者あり。體軀は瘦形にて、筋肉の發育も著しからず。力量は中位に屬し、背と腰とは扁平にして、歩行の調子は緩漫なり。婦人の顔色は稍、光澤を有すれど、婉麗と稱すべきもの甚だ尠し。男子の鬚髻は多くして黒く、婦人の頭髮は黒く滑かなれど、粗硬にして縮れたるもの無し。要するに此土人の毛髪は蒙古人、西藏人などに比すれば固より柔かなれど、歐洲人に較ぶれば概して硬き方なり。顔面は廣しと云はんよりは、寧ろ高しといふべく、婦人の額は狭小なれど、男子のは廣狭一樣ならず。何れも後方に殺滅たるもの多し。耳朵は厚大にして、眼目は深く窪み、その間隔は廣し。顴骨の突起は甚しからず、鼻梁は多く端正なれど、時に鈎形をなすものあ

り。鼻口は大に、齒は白く、上唇は下唇よりも薄く、頭蓋は短頭式に屬す。此骨格を以て之を觀れば、新疆省の Turkesian 人は Arya 種たる Iran 人に類似せざる同様の程度に於いて亦蒙古人、Turk 人とも違へり。例へば Yakut, Alai 等に住する Turk 人の如きは、此土人に比すれば身長低く、顔面廣平にして鼻また高からず。此點を以て之を見れば、新疆省の土人は寧ろ Arya 種に類すといふを得べし。然れども Iran 人は此土人の如く瘦小ならず、硬毛を有せず、額部は後方に殺減せず、頭蓋は短小ならず。此點を以て之を論ずれば、此土人は寧ろ蒙古、Turk 等の Fatar 種に類似すといふを得べし。之を要するに新疆省の土人は Turco-tatar 種と Indo-Iran 種との雜種なりと云へり (Mission Scientifique dans la Haute Asie, pp. 12-14)。次に Stein 氏が和蘭及び Karia に住する土人の種類に就いて記述する所を紹介すべし。氏は和蘭にて蒐集せる材料を英國の人種學者 Joyce 氏に提供して、その調査研究を依頼せしに、Joyce 氏は資料の僅少なる故を以て、單に大體の推測を施せり。同氏の說によれば、和蘭及び Karia に住する人民の體質に於いては、所謂蒙古式と稱する特徴の存するを認めず、還て知蘭人の如きは、その容貌、頭髮、眼瞳の性質及び色彩、頭蓋骨の示數等に於いて、Pamir の高地に住する Galia 人に最も密接なる類似を有す。Galia 即ち山地の Tadjik 人は Lapouge 氏の所謂 Homo Alpinus 種の好模型ともいふべきものにて、その Arya 種たるや疑ふべからず。此 Galia と和蘭人とはまた身長、鼻形、顔面等に於いて互に相異なるものあり。例へば和蘭人の頭髮及び眼瞳は Galia 人に比して稍、黒し。此等の差異は和蘭人に Turk 及び西藏血統の混入するが故なるべく、特に

身長の低き、鼻の廣き、毛髪の黒き、眼瞳の暗黒なる部分は主として西藏系統に屬する性質にして、Keriaの土人に於いて此特徴の顯著なるを見る。之を要するに和闐及びKeriaの土人は大體に於て Arya種に屬し、之に Turk及び西藏の二種を加味したるものと謂ふべし (Andriant-Khotan, Vol. I, pp. 144-145)。

以上歐洲の諸大家が Faria 盆地に住居する民族の血統に關して記述考察せる所を總括するに、此土人の本質が Iran種の白哲人にして之に Turk、西藏の黄色人種を混加せる雜種なりといふに於いて全く相一致せり。而して此状態は現時に於けるが如く、過去に於いて殊に本論に關する漢時代に於いても亦同様なりしか否か。余輩はこれより東西の記録に徴して之が論證を試むべし。

漢書^{卷九}十六の西域傳大宛の條を案ずるに、自宛以西至安息國、雖頗異言、然大同、自曉知也、其人深目多髻、善買市と見えたり。漢代の大宛國は大體に於いて今の Fergana 州に當り、安息國は今の波斯に據れる Parthia 國なれば、當時葱嶺より以西波斯に至る地域に Iran種の蔓延せるは明かなり。然るに葱嶺以東 Faria の盆地に住せる城郭國の人民に就いては、史記漢書俱にその容貌骨格を記さず。想ふに此土人の容姿は漢人と大同小異にして、その注目する所とならざりしが故か、但しは史官の粗略に因れるか。そは何れにありとするも、漢代の記録は此土人の種類を推定するに足るべき積極的の明文を與へざれば、余輩は先づ Faria 盆地の縁邊に據れる古代民族の種類を考察し、以て間接にその中央に位せる城郭諸國民の系統

を推測せんと欲す。

漢書の西域傳を案ずるに、尉犂國の官名に擊胡君あり、車師後王國に擊胡侯あり、侯須國に擊胡侯、擊胡君の外に擊胡都尉あり、又焉耆國に郤胡侯あり。此等の官名は西域の諸國をして漢天子に忠順ならしめ、専ら胡國に當らしめんの意を寓したる者なれば、當時新疆省に據れる城郭諸國が胡族にあらざりしは明かなり。胡の名は後漢の頃より漸く廣漠となり、總て西夷をいふ汎稱と變ぜしが、史記及び漢書に見えたる胡は専ら匈奴を指し、なり。故に此二書の匈奴傳に記せる匈奴の冒頓單于が漢帝に贈れる書中に、南有大漢、北有強胡、胡者天之驕子也とありて、匈奴は自ら胡と稱せしなり。又西藏種の羌が胡にあらざりしは、漢書の西域傳に罽羌國王の號を去胡來王と曰ひ、その匈奴傳に「西置酒泉郡、以隔絕胡與羌通之路」とありて胡と羌とは常に劃然と區別せられたるにて知るべし。此等の例證に依りて前漢時代の胡は匈奴なりしを悟るべきが、さて此匈奴が今の何人種に屬すべきかは、更に考究を要する問題なり。現今の東洋學者は多く匈奴を以て「Hun」種と爲して之を疑はず。余輩も嘗て此説を奉じ、且つ之が證明を試みたることありしが、後に至りて此考察の誤れるを悟りしかば、嘗て史學雜誌に蒙古民族の起原と題する論文を掲げて、匈奴が蒙古種に「Mongols」種を加味せる雜種なるを論證せり。爾來研讀を重ねたる結果として、更に此論文に追加、訂正を施すべき必要を感じたり。而して匈奴の「Hun」種なるか否かは、此民族の西方に住せる民族の種類を判定するに大なる影響を與ふるものなれば、爰に匈奴語を列舉して之が解釋を試む

し、又史記匈奴傳闕氏の注に「索隱曰闕氏舊音曷氏匈奴皇后號也」とあるによれば、闕氏は *kuatzi* 或は *kuatzi* なり。闕字の我國に傳はれる音は *kuatzi*、安南字音は *kuatzi*、韓字音は *kuatzi* なり、又唐書回鶻傳に駭馬一名曷刺國とあり、Turk 語にては駭を *ala* とし、曷刺はその對音なり、又元史の土土哈傳に蒙古語の *aradja*、即ち酪酒を曷刺齊と譯せる例などによりて之を察するに、曷氏と同音なる闕氏は漢代に *kuatzi* と音ぜしなるべし。Tunguse 語にては妻を *asi*、*asi*、*asiw*、*asiwua*、*sin*、*azi* とし、曷ば匈奴語の闕氏はこの *asi*、*asi* の對音なり。又 Buriat-Mongol 語にて妻を *iz*、*ize* とし、ふも、亦同語源に屬すべし。

焉支。漢書卷九十四上匈奴傳に見えたる焉支山の注に「正義焉音烟、括地志云焉支山一名刪丹山在甘州刪丹縣東南五十里、西河故事云、匈奴失祁連焉支二山、乃歌曰、亡我祁連山、使我六畜不蕃息、失我焉支山、使我婦女無顏色、其慙惜如此」とあり。たゞ此文のみにては焉支山の意義を知るに由なけれど、史記匈奴傳の引用せる習鑿齒が燕王に與へたる書中に「山下有紅藍、足下先知不、北方人採取其花、染緋黃、採取其上英、鮮者、作烟支、婦人採將用爲顏色、吾少時再三過見烟支、今日始觀紅藍、後當足致其種、匈奴名妻作闕氏、今可音烟支、想足下亦不作此讀、漢書也」とあれば焉支は烟支の異譯にて、此山中に烟支を産するが故に、その名を得たるなり。習鑿齒は匈奴語皇后の號闕氏を烟支に起れりと爲せど、是れ固より俗解たるを免れず。顏師古が闕氏の注に「闕氏、連反氏音支」といへるによれば、闕氏は *kuatzi* と音じ、烟支と同音なりと思はれんが、支の古音に二様ありて、唐韻韻會に章移切、正韻に旨而切とあるによれば、其音は *kuatzi* なら

奴語の焉支烟支は、yen-ki と音じ、蒙古語の önge' öngö' üngü' Türk 語の üng' öng' öngüh の對音なるべし。而して此言の原義は色彩なるべきが、其より轉じて或は顔色、容貌をいひ、或は顔色を粧飾する花粉、花英をいひしなるべし。果して然らば匈奴語にては焉支と關氏とは全く關係なき言と知るべし。

逗落。史記匈奴傳の注に、匈奴名塚曰逗落とあり、又杜氏通典の注に、匈奴名種曰逗落とありて、逗落の解釋に二様あり。今その何れか正しきを知らず。試に兩義に従つて語源を案ずるに、Buriat 語 (Tunkinsk 方言) にて墓を dara とす、(Podgor. p. 156, b. Cast. p. 153. a) 蒙古語にて darusi とす、(Kowal. p. 1673. a) 史記の逗落はこの言の對音なるべし。又蒙古語にては種子を蒔く耕作するを tari-kin とす、Tunguse 語にては tarim とす、Türk 語にては taro-mak とす。杜氏通典の逗落はこの言の對音なるべし。

甌脫。史記匈奴傳に見えたる甌脫の注に、韋昭曰界上屯守處、索隱曰服虔云土室以伺漢人、又纂文曰甌脫土穴也、又云地名、故下云生得甌脫王、甌音一侯、反脫同、活反、正義按境上斥堠之室爲甌脫也とあり。今試にこの語脈を案ずるに、Buriat 語の中 Nizenendinsk 方言に非常倉を o-ek' Khorinsk 方言 Tunkinsk 方言に okok とす、(Podgor. p. 97. b) Tunguse 語にて天幕を okok とす、又 Türk 語族中 Osman 語に室を oda' Ögatai 語に住室を otak' Öwasi 語に羊の圍場を odar' Altai 語に厩を odu' Kirgiz 語に物置場を otok' Yakut 語に之を otu とす、又 Magyar 語に穴を odu' Itis-Ostjak 語に小天幕を udap, Surgut-Ostjak 語に ot'ap' Kott 語に atak, Ostjak-Samojed 語に äde' éhe' yed-

o aeto とらふ。匈奴語の阨脱は此等の言と同語系に屬すべし。

屠者

匈奴語にては賢を屠者といへり。その徴は史記の匈奴傳に「匈奴謂賢曰屠者」徐廣曰屠一故常以太子爲左屠者王とあるにて知るべし。屠者の屠字は徐廣に従へば、諸字と音通なるが上に韓字音はyo. なれば屠はyo. so と音せしなるべく、又着字の漢代の音がH. なりしは焉支の條に詳説したる如くなれば屠者はso. ki. yo. ki. と音せしものと見てその解釋を爲せざるべからず。ちて蒙古語にては正直をüge とす。Burjat 語にては seke, sike, cixe とす。(Cast. p. 158. a. 195. b) Tunguse 語にては säkä cäkä. y. s. y. (Cast. p. 103. b)。

匈奴語の屠者は此言の對音なるべし。又 Turk 語族の中 Koibal 語に賢を sägastex' Salbinsk 語に sägäštyx' Karagass 語に sägäštyx とすも亦同語源に屬すべし (Cast. p. 147. b)。

徑路

匈奴語にては寶刀を徑路といへり。其證は漢書匈奴傳に見えたる徑路刀の注に

徑路匈奴寶刀也とある是なり。F. Hirth 氏によれば Turk 語族の中 Talout 語にては小刀を kyngyrak とす。東 Turkestan 語にては之を qingrak とす。匈奴語の徑路は此言の對音なりと (Amenetafel Atilis's. p. 223.)。然れども Indo-Europa. 語族の中 Wakhan 語にては劍を Khingār' Chirral 語にては Khangar' khongur' Kasmir 語にては Khangar' 波斯語にては Klhangar' khingār' y. s. y. (Tomasschek, Centralasiatische Studien II. p. 801) Turk 語の kyngyrak' qingrak' y. s. y. Iran 語の khingār の傳來にて而もその轉訛したるものならんか。匈奴が之を寶刀として珍重し又之を徑路神として奉祀するなどを以て之を祭するに、徑路及びその名稱は共に外國のものにあらざらん。

るなきか。

居次。漢書匈奴傳に見えたる居次の注に李奇曰居次者女之號漢言公主也とあれば匈奴にては公主を居次といひしなり。Türk語にては女を *hiz* といへば居次はその對音なるべし。

祁連。漢書武帝紀に見えたる祁連山の注に師古曰即祁連山也匈奴謂天爲祁連祁音巨夷反今鮮卑語尙然とあれば匈奴及び鮮卑の二國語にては天を祁連と呼びしなり。而して顏師古が此處に與へたる注釋に従へば祁連は *Ki-lia* と音ずれど同氏が漢書霍去病傳に見えたる祁連山の注に祁音士夷反といへるによれば祁連は *Si-lia* と音ずべきなり。此の如く顏師古は祁連の名に二様の發音を與へたれど滿洲語にては天を *Kulim* といへば祁連は之と語源を同じうする言なるべし。

若鞮。後漢書卷一百十九の南匈奴の注に匈奴謂孝爲若鞮自呼韓邪單于降後與漢親密見漢帝諡常爲孝慕之至其子復珠累單于以下皆稱若鞮南單于比以下直稱鞮也とあれば匈奴語にては孝を若鞮と云ひしなり。若鞮二字の中若字は官話音にて *wo* なれど温州音にて *wo* 寧波音にて *nah* 國字音にて *zanku* 韓字音にて *zalk* なり又鞮字の官話音は *ni* なれども廣東音漢口音にて *ai* 福州音にて *tao* 國字音にて *ai* 或は *ai* なれば若鞮の二字は漢代に *zalk-tai* と音ぜしと見て之が解釋を試むるを穩當とすべし。

ちて滿洲語にては孝を *hiyosun* 或は *senggime* とすへど *hiyosun* は漢語孝順の字音なれば

senggim が土言なり。又滿洲人の祖先と思はるゝ女眞の言語にては孝及び兩親を塞革更と
 する (Grube, p. 98) Tunguse の一種たる Gold 語にて孝及び親戚を sénggisal とする。 (Grube, Gold.
 Wörter, p. 90 a) 而して滿洲語にては血を senggi とする、女眞にては塞古とする、又 Tunguse 語族の
 中 Gold 語に之を séksa, Olča 語に söxse, Oročen 語に šekse, siakša, Mančgir 語に saksā, Castrén 氏
 の Tunguse 語に saksā, Kóndogir 語に sauksa, Udskoje 語に hankšā, šáhā, 下部 Tunguska 語に šagšā, Berg-
 zsin 語に Angara 語に šokšo, Jemisei 語に šoša, Tamut 語に sugā, Wihui-Tunguse 語に hōksa とする。
 (Grube, Gold, p. 90, ab.) 因つて察するに滿洲語孝とする seng-gime 及び Gold 語の sénggisal は滿洲語
 にて血とす、senggi に關係を有し、女眞語にて孝とす、塞革更は同國語の塞古及び Tungu-
 se 語の saksā, séksa 等に緣故を有する言なるべし。而して滿洲語の senggi が Tunguse 語の sék-
 se 女眞語の塞古と同語なるは、亦言を待たず。果して然らば Tunguse 語に於て孝を sen-
 ggime, 塞革更とすは、血縁を有する義より轉化したるものと知るべし。又蒙古語族の中
 Khalkha 語に血を tsusun, Seleginsk 語に üsun, Tunkinsk 語に Alarsk 語, Balagensk 語, Khorinsk 語, Niz-
 endinsk 語に gghan, süghun とする (Podgor, p. 136, a) 又 Castrén 氏によれば Khorinsk 語 Nizneu-
 dinsk 語に nen, sühung, Tunkinsk 語に šühun, Seleginsk 語に Čoso とする (p. 188, a) Dakhur 語に Cosé と
 する (Iwanow, p. 65, a)。此等の蒙古語は上に列擧せる Tunguse 語と同語源に屬するものなり。
 而して Tunguse 語に於ては血に塗れたるを saksāiti-sāksāiti とする, Buryat 語族の中 Niznedin-
 sk 語に nen, šuhuté, Tunkinsk 語に Khorinsk 語に šuhutai, Seleginsk 語に Čosotoi とする、(Castr. pp.

188. a. 101. a) 共に血のあるの義なり。東胡の苗裔なる契丹語に於いては孝を赤寔得本或は得失得本といふ。その證は遼史卷三十一に孝文太弟敦睦宮謂之赤寔得本幹魯朶孝曰赤寔得本とあり又同書卷百十六に得失得本孝也とあるにて知るべし。此の赤寔得本及び得失得本の末尾をなす「本」の一語或は語尾なるべきは、同國語に討平を奪里本蒙古語 *daihaqin* 滿洲語 *daiha-mbi*) としへば赤寔得及び得失得が語根と知るべし。而して赤寔得の赤寔得失得の得失は Tunguse 語の *seksa' saksai* 或は蒙古語の *shun'* *tsoum'* *coso* に該當しその末尾に見えたる得は Tunguse 語の *ai* 蒙古語の *ai* に當る語にて赤寔得失得は血縁あるの義より孝親戚のことに轉じたる言なるべし。而して匈奴語の若鞮の若鞮は契丹語の赤寔得は得に應ずる言にて若鞮は Tunguse 語の *saksai'* 蒙古語の *shuk'ai* に均しき語形と悟るべし。尤も現今 Tunguse 語にて *saksai'* としへば血塗の事をしへど上代はまた血縁を有するもの即ち兩親親戚又は孝順をいひしなり。

又蒙古語に孝尊敬敬順を *takimdaghu* としひ長上兩親を尊敬するを *takimtai* としひ犧牲尊敬するを *takikhu* としひ (Kowal. pp. 1656 b. 1659. b.)。此等の言は匈奴の若鞮と異なる語根なるべし。服匿。宮崎博士は史學雜誌第七七號に日韓兩國語の比較研究と題する論文を掲げたるがその中に國語にて笄缶の類を保止支としふは韓語の *pa-tang-i* 高麗の服席匈奴の服匿と同語なるを考證せられたり。さて蒙古語にては罌を *butung* としひ滿洲語にては *butun* としへば匈奴語の服匿 (*puk-took*) は此等の言と同語なり。又 Magyar 語にて壺を *fazek* としへば

同語源に屬すべし (Simonyi Zsigmond és Balasa Jozsef. Nemet és Magyar Szótar. p. 101. a.)。

馱[○]駝[○] 駝[○]駝[○] 史記の匈奴傳^{百卷十}を案ずるに其奇畜則橐駝驢羸馱駝駟駝駝駝逐水草遷徙

と見えたり。宮崎博士は上文の馱駝を蒙古語の *kuia lagusa* の *kuia* 滿洲語の *kuia* *lorin* の *ku-*

kuia 又驢駝を蒙古語及び滿洲語の *kuia* と考定せり (史學雜誌第十八卷第七篇)。御製五體清

文鑑^{卷十三}四體合璧文鑑^{卷十三}を案ずるに驛族の畜類にして滿漢蒙三國の名稱に類似するも

のあり。例へば前記の馱駝驢駝の外に駝駝を滿洲語にて *ghin lorin* とし蒙古語にて *ghin*

lagusa とし驢駝を滿洲語にて *djementu lorin* とし蒙古語にて *djemeng lagusa* とし又駝

駝を滿洲語にて *tonotu lorin* とし蒙古語にて *tobor lagusa* としこの類即ち是なり。滿洲語

の *lorin* 蒙古語の *lagusa* は共に驛のことなり。欽定蒙文彙書^{卷十四}には驢駝を駝駝に駝駝を

駝駝に作れり。

稽[○]粥[○] 史記の匈奴傳を案ずるに冒頓死子稽粥立^{素隱曰稽音} 號曰老上單于老上稽粥單于

初立^{徐廣曰一日稽粥第二}と見えたり。宮崎博士の考察によれば稽粥は匈奴語にて第二の義

なり。而して粥字には之六余六の二切あれど爰には之六の反切に従ひ稽粥二字は *ké-ülk*

ké-ülk と音じ蒙古語の *hojatugar* (即ち第二)の對音ならんとし。蒙古語族の中長城附近

蒙古語にて *koj* *gojer* *Khalkha* 語にて *khoir* *Burjat* 語にて *koir* *olót* 語にて *khojur* *khojur* と *ko*

(Klap. A. P. p. 284) 又 *Burjat* 語族の中 *Balagansk* 語 *Seleginsk* 語 *ko* *xajar* *Tunkinsk* 語 *Alarsk* 語

に *kojur* *Tunkinsk* 語に *koir* *Balagansk* 語に *kojor* と *ko* (Podgor. p. 72. a) *Oastrén* 氏に従くは *Burjat*

語にては之を *xojer' xojir' とす* (p. 125 a) *Dakur* 語にて *xojir' koiró' koiró' koirá' とす* (Twanow, p. 62. a)。因て案ずるに稽粥の稽 (ke) は *xoir' koir'* の轉訛或は略譯なるべく又粥の安南音は *tuuo* その同音たる育の安南音は *tuu* なれば *Burjat* 語の順序數を表はす *deki' de' xata' daxi' kai'* とも變化 *Burjat* 方語の中 *Tunkinsk* 語に第二と *xoidaxi' xojurkai' とす* *deki' de' xata' daxi' kai'* とも變化するを見るべし (Podgor. p. 49. a)。

頭曼。史記の匈奴傳によれば冒頓單于の父を頭曼とす。Hirth 氏は之を *Turk* 語の萬とす *tuunen* の對音なりとせり (Die Ahnentafel Attila's, p. 230. Anm. 1.)。然れども蒙古語及滿洲語にては亦萬を *tuunen* とす。

冒頓。史記の匈奴傳によれば頭曼單于の子を冒頓單于とす。冒頓の古語に就いては漢書匈奴傳の註に朱祁曰冒音墨頓音毒無別訓姚令威云僕聞董仲舒傳冒音莫克反又如字司馬遷傳亦音莫克反とあれば冒頓は當時 *bok-dok* と音せしなり。Hirth 氏は之を *Turk* 語及び蒙古語の *bagatur* と考定したれど余輩は寧ろ之を蒙古語神聖の義を有する *bogdo* の對音ならんと思惟す。漠北の韃靼人が清朝の天子を *Bogdo Khan* と稱せしはよく人の知る所なり。骨都侯。史記漢書の匈奴傳によれば匈奴の大官に骨都侯といふあり。蒙古語にては威嚴神聖幸福を *klintuk* とす *くば* (Kowal. p. 913. a) 匈奴の骨都侯はその對音なるべし。 *Turk* 語に之を *kut* 或は *kuhiok* とすも同語源に屬す。

烏朱留。後漢書の南匈奴傳によれば匈奴の第十七代の單于を烏朱留とす。蒙古語に

ては好運好機會を *uzur* とす。(Kowal. p. 420) 匈奴の烏朱留は蓋し此言の對音なるべし。

於除建 後漢書の南匈奴傳によれば、匈奴の第二十三代の單于を於除建とす。成吉思汗の父也速該の子に *Usiken* とすものあり。匈奴の於除建と同名なるべし。Dakhur 語にて小を *uiken* *ussin* *isiken* *istien* とす匈奴の於除建は之と同義なるべし (Iwan. p. 65. b)。

以上余輩が考察比較せる所に誤なしとせば、匈奴語二十一言の中 *Turk* 語のみにて解釋せらるべきは居次、徑路の二言に止まり、その餘は悉く蒙古語或は *Tunguse* 語に密接の類似を有するものなり。殊に匈奴語の數詞が蒙古系統に屬するは、此民族の所屬を判定するに屈るは、余輩の研究によりて證明せられたりと謂ふべし。唯匈奴語の今日に傳はれるもの甚だ僅少なれば、今之によりて直に此民族の種類を推定せんは寧ろ臆斷の嫌あるべし。然れども匈奴の同類と思はるゝ東胡民族の言語は幸にも多く後世に遺れるを以て、余輩はこれによりて此民族の系統を知ると共に、亦間接に匈奴の種類をも推測するを得たり。東胡民族は現今 *Tunguse* 種なりと信ぜらるれど、是れ固より何等の根據ありて然るにあらず。余輩が東胡民族の言語を研究したる結果によれば、此民族の言語は匈奴語の如く蒙古及び *Turk* の二國語を混合したる雜種語なり。從來東胡は匈奴と全く別れる民族の如くに思はれたれど、その實此二民族の同一種なるべきは、その名稱の上より見ても明かなり。史記の匈奴傳に見えたる東胡の注に、索隱曰服虔云東胡烏丸之先後爲鮮卑、在匈奴東、故曰東胡とあ

り。即ち此民族は匈奴即ち胡の東方に據りし胡族なりしが故に、これを東胡と呼べるにて、東胡は畢竟匈奴の一種たるに過ぎざりしなり。故に東胡の言語が蒙古及び Tunguse の二語を含有するが如く、匈奴語に於いても亦然りしなり。而して匈奴語に於いて稍々 Turk 語の痕跡を認むるは、その西方に位し Turk 民族と接觸したる結果にして、固より匈奴語の主要分子にあらざるは、察するに難からず。現今東方亞細亞に於いて、蒙古語と Tunguse 語との混合によりて成れるもの二あり、即ち Dakhur 語及び Solon 語是なり。此國語は既に蒙古及 Tunguse 二語の雜語なるが故に、その何れの國語にも膾合せざるは勿論なり。然れどもその配劑分子の輕重、多少によりて強ひて之が分類を爲すときは、Dakhur 語は蒙古語系に屬し Solon 語は Tunguse 語系に收むべきものなり。然らば如何にしてその分子の輕重多少を知るかと云へば、その國語の有する數詞によるを通則とす。Dakhur 語の數詞は蒙古語なるが故に、之を蒙古語の門に收め、Solon 語の數詞は Tunguse 語なるが故に、之を Tunguse 語族に列するなり。而して此分類法を匈奴及び東胡の二國語に應用せんに蒙古、Tunguse の中何れの語系に屬すべきものなるか。既に前段に考證せしが如く、匈奴語の數詞が蒙古語なることは、その此語系に收むべきを示すものなれど、その數詞の今日に傳はれるは僅に一語に止り、且つ徐廣の解釋を根據とするが故に、頗る不安の念なき能はず。然れども東胡民族の中契丹は幸にも正確なる數詞二語を後世に傳へたり。其徵は遼史^{卷五十三}に「五月重五日、午時採艾葉和綿著衣七、以奉天子南北臣僚各賜三事、君臣宴樂、渤海膳夫進艾餠、以五綵絲爲索、纏臂、謂之

合歡結、又以綵絲宛轉爲人形簪之、謂之長命縷、國語是日爲討賽咿呢、討五賽咿呢、月也、とあるに
よみて、契丹語にて五を討といひしを知るべし。又同書卷百十六國語解の條に「六瓜、瓜百數也、遠
有六百家、奚後爲院、義興五院同、二院即迭刺部、折之爲二者是也」とあれば、契丹語にては百を瓜
といひしなり。さて此契丹の二語が何語に屬するかを考へんに、蒙古語系の中長城附近の
蒙古語にては五を *tabun*、*Khalkha* 語にては *tabur*、*Olöt* 語にては *tabun* と *ᠰᠤᠪᠢ* (*Klap. A. P. p. 285*)、
Dakur 語にては *tábu*、*taǰur*、*táwun* と *ᠰᠤᠪᠢ* (*Iwanow. p. 69. a*)、*Burjat* 語にては *taban*、*tabun* と *ᠰᠤᠪᠢ*、
(*Podgor. p. 256. b*)。契丹語の討は明かに此蒙古語の對音にて、*Dakur* 語の *tabur*、*táwun* と語形
の酷似せるものなり。而して賽咿呢は蒙古語 *sam* に當る言にて、正しく月の義なり。又蒙
古語族の中長城附近の蒙古語にて百を *zaxun*、*zun* と *ᠰᠤᠪᠢ*、*Khalkha* 語にて *zö*、*sulu* と *ᠰᠤᠪᠢ* (*Klap.*
p. 289)、*Burjat* 語にて *xü* と *ᠰᠤᠪᠢ* (*Podgor. p. 294. b*)、*Dakur* 語にて *tsao* と *ᠰᠤᠪᠢ* へば、契丹語の瓜は瓜
の誤寫にて、*Dakur* 語の *tsao* に當る蒙古語なり。此の如く東胡民族に屬する契丹の數詞が
明白に蒙古語なる以上は、その類族たる匈奴の數詞も愈々また蒙古語なるべければ、此二民
族は全く現今の *Dakur* 人の如く蒙古を骨子とし、之に *Tunguse* を加味したる雜種と斷定す
べきなり。而して匈奴語に *Turk* 語の存するは猶東胡の苗裔たる鮮卑の拓跋語に同語を含
有するが如きものにて、これ固より痕跡に止まり、必しも胡族元來の本色を左右すべきもの
にあらざるなり。

匈奴及び東胡が愈々蒙古を骨子とし、*Tunguse* を加味せる雜種なりしとせば、此構成分子

たる二民族の本地は、必ずその背後に求めざるべからず。之を過去の記録に徴し、又現在の人種の配布に鑑みるに、松花江及び黒龍江の中流域以東は蓋し Tungus 民族の根據地にして、Balai 湖以東黒龍江の上流域は蒙古民族の搖籃地なるべし。而して此二民族は太古より絶えず、中國に侵入せんと欲して、その北部に集合せしかば、その間に自ら相混和融合して余輩の所謂胡族を形成し、その東方西喇木倫の流域に據れる者は東胡と稱せられ、西方陰山々脈を保ちしものは匈奴と呼ばれしなり。而して周末秦初に於て匈奴の右翼は陝西の北 Orkos 地方を合容し、背後は Orkhon 及び Tola の二流域に至りて、蒙古民族の本源地に接續せりと思はるゝが故に、Turk 民族の本土はこれより以西に存せざるべからず。

漢時代に匈奴の北に丁令、その西に堅昆と稱する民族の存せしことは、漢書^{卷九十四上}の匈奴傳に「支見烏孫兵多、其使又不反、勒兵逢擊烏孫破之、因北擊烏揭、烏揭降、發其兵、西破堅昆、北降丁令、并三國、數遣兵擊烏孫、常勝之、堅昆東去單于庭七千里、南去車師五千里、郅支留都之」とあるにて證すべし。さてこの文中に見たる烏揭、丁令、堅昆三國の中、烏揭を除き、他の二國の方位と種類とは後世の記録によりて之を知るを得べし。魏書^{卷一百三}の高車傳を案ずるに「高車蓋古赤狄之餘種也、初號爲狄歷、北方以爲勅勒、諸夏以爲高車、丁零、其語與匈奴同、而時有小異、或云其先匈奴之甥也、其種有狄氏、袁紇氏、斛律氏、護骨氏、異奇斤氏」とあり。此文中の丁零は史記の丁令なれば、漢代の丁令は南北朝時代の高車部なり。又唐書^{卷二百一十七上}の回鶻列傳を案ずるに「回紇其先匈奴也、俗多乘高輪車、元魏時亦號高車部、或曰勅勒、訛爲鐵勒、其部落曰袁紇、薛延陀

契苾羽都播骨利幹、多覽葛僕骨、拔野古、同羅、渾、思結斛薛奚、阿跌、白鬻凡十有五種、皆散處磧北、袁紇者亦曰烏護曰烏紇、至隋曰韋紇」とあれば丁令即ち高車、丁零が *Türk* 種なるは亦論を待たず。たゞ魏書によれば、高車の言語は匈奴と大同小異なりといひ、或は其祖先は匈奴の甥なりといへり。若しも此書の云ふ所の如くならんには、匈奴は亦 *Türk* 種に屬すと爲さざるべからず。然れども司馬晋以後南北朝に、互りて漠北に崛起せる民族は、大概その祖先を匈奴に求む。蓋し此等の民族の君長が自家の門地を張らんが爲に、前代の大國に系統を附會するは、人情の自然なれば、假令魏書に匈奴の甥が高車、丁零の祖先なりといひ、又高車と匈奴とは言語を一にすとあるも、此等の記事を證據として、匈奴の種類を推測せんとするは大に不可なり。漢代に於ける丁令が、匈奴の北に據れる異種にして、而も其敵國なりしは、漢書史記の文によりて明かなり。丁令の住地は漢代の記録に明載せられざれど、*Orkhon* 河の流域に據れる匈奴の北にありしは確かなれば、當時の丁令も魏代の高車の如く、*Selenga* 河の流域に住せるものと見て差支なかるべし。果して然らば漢代に於いて *Türk* 民族は *Baikal* 湖の南方まで蔓延せしなり。而して丁令は何れの頃より此地に住せるかは明かならざれど、後世 *Altai* 山中に據れる突厥、薛延陀が常に此方面より *Orkhon* の流域に遷徙せる事實を以て之を推測するに、丁令の如きも亦此山脈より北進せるなるべし。

又匈奴の西に據れる堅昆は唐代の黠戛斯なり。黠戛斯のとは唐書^{卷二百十七下}回鶻列傳に「黠戛斯古堅昆也、地當伊吾之西焉、耆北、白山之旁、或曰居勿、曰結骨、其種雜丁零、乃匈奴西鄙也、匈奴

封漢降將李陵爲右賢王、衛律爲丁零王、後郅支單于破堅昆、于時距單于延七千里、南車師五千里、郅支留都之、故後世得其他者訛爲結骨、稍號紇骨、亦曰紇挖斯云、衆數十萬、勝兵八萬、直回紇西北三千里、南依貪漫山、地夏沮洳、冬積雪、と見えたり。而て黠戛所、結骨、紇骨、紇挖斯、居勿忽の諸稱は皆 Kirgiz の對音なれば、漢代の堅昆は Kirgiz なり。黠戛斯の住地に就いては唐書に「阿熱牙至回鶻牙所、棄它四十日行、使者道出天德右二百里許、抵西受降城、北三百里許、至鷓鴣泉、泉西北至回鶻千五百里許、而有東西二道、泉之北東道也、回鶻牙北六百里、得仙娥河、河東北曰雪山、地多水草、青山之東有水曰劔河、偶艇以渡、水之悉東北流、經其國、合而北、入干海」と記せり。青山は黠戛斯王阿熱の牙帳の所在地にして、劔河は Jensei 河の上源流 Kem なれば、黠戛斯の領土は此の水域にありしなり。而して漢代の堅昆も亦此地域に據りしや否やは、漢書にその明文なければ、此國が匈奴及び丁令の西方に位し、而も單于の邊を距ること七千里など、あるによりて之を察するに、Kirgiz 民族の住地は漢代より唐代に至るまで、毫も變更なかりしが如し。

黠戛斯の言語が Turk 語なりしは、唐書に其文字言語與回鶻正同とあるにて知るべく、またその文中に見えたる黠戛斯語の *Турк* 語にて解釋せらるるにても明かなり。然れども唐書が此國人の容貌を記したる處に、長大赤髮、皙面、綠瞳、以黑瞳爲不祥、黑瞳者必曰陵苗裔也とあれば、此民族が元來 Turk 種にあらざりしを察すべし。故に Klaproth 氏はこれを Indo-Europa 種の Turk に化し去れるものなりと説き、(Tableaux historique de l'Asie p. 16) 又 Schott 氏は之に反し

て、赤髪は亦 Fin 種の間によく見らるゝが故に黠戛斯人は元來 Fin 種或は Samojed なるべしと推測せり (Die echten Kirgisen, p. 44)。余輩は此問題に關して別に新規の意見を有せず。然れども Arya 民族が此の如く北方に蔓延せりとは思はれざれば、暫く Schott 氏の説を以て穩當の解釋と爲さざるべからず、唐書によれば黠戛斯國に於いて黑瞳の人は李陵の苗裔なりとあれど、是れ蓋し漢人の臆測にして、實は此國に雜住せる丁零なるべし。而して赤髪綠瞳の黠戛斯人が自國の言語を忘却して Turk 語を採用するに至りしは、畢竟外部より侵入せる黑瞳の Turk 人に壓當せられたる結果ならずんばあるべからず。果して然らば Finno-ugri 民族は嘗て Ural 山脈より以東 Jenisei 河の源頭に至るの地域に蕃殖せりと思惟せざるべからず。而して Ural 山脈の南部が太古より Ugri 民族の故地なりしは、既に泰西學者の研究によりて闡明せられ、Aral 海及び Caspi 海の北岸が奄蔡、阿蘭と稱する Arya 民族の游牧地なりしは、漢書、史記の記載によりて之を證すべく、河間の地に當る Chorasnia, Bactria 及び Scythiana 諸國が Iran 種なりしは、亦論を要せず。 Syr 及び Amu 二河の上流域、葱嶺の溪谷が Galia 民族の本地なるは、學界の均しく認むる所なり。而して葱嶺の東 Tarim の盆地に住する人民が Tatar 種と Arya 種との雜種なるは、既に前段に陳述せしが如し。此の如く中央亞細亞に於ける古代民族の方位を考察し來れば、古來騎射を以て世界の歴史上に活動せし Turk 種族は、果して何れの處に求むべきか。思ふに Tarbaghatai を中心として、東方は天山の北、Altai 山脈の南北西方は Alexandria, Kara-Tau 二山脈の北、Kirgiz の曠野を以て之に擬するの外、更に

餘地なかるべし。而して余輩の此推測が果して實際に脗合するや否やは、東西の記録に徴して之を知るべきのみ。

漢の武帝が張騫を西域に遣はし、時に今の Kirgiz の曠野に游牧せる民族を康居とす。

余輩は前號康居考の條に於いて、其國號及び都城の名を Turk 語にて解釋し、又その東境に位する都頼水を今の Talas 河なるべきを論證せり。Talas の意義は未だ詳ならず、唐書卷十三上の地理志に長城より回鶻の牙帳に至る道程を記したる文中に、坦羅斯山の名を擧げたり。而して此山名は漢書の都頼に當るべき唐書卷二百五西域傳の怛羅斯、西域記卷一の阻羅私と同名にて、共に Turk 語なるべし。漢書の陳湯傳によれば、康居と烏孫との間に闐池と稱する湖水あり。Turk 語にては海及び大湖水を tengiz 或は dengiz といへば、闐池は正しくその音譯ならん。又同書によれば、康居の東、今の伊犁河 (Ir) の下流域に伊犁といふ國あり。その名伊犁河に起れるなるべく、Turk 語にては剃るを III といへば、伊犁は蓋しその對音なるべし。既に前にも述べたる如く、大宛國にては貴人の勇將を煎靡といへり。此名は Turk 語の Songis bi の音譯にて、戰君の義なり。大宛國の土人が Tria 種なりしは、史記漢書の文面にて明白なるに、その貴人の名稱が Turk 語なるは、甚だ怪むべきに似たれど、察するに此國も亦その隣國粟弋 (Sogd) 大夏 (Bactria) の如く、當時は已に北方の Turk 人に征服せられしなり。されば此國にて治者の位置にありし王侯貴人が Turk 語にて呼ばれしは、當然の事にて、而も彼等が康居の方面より南遷せるは、察するに難からず。余輩は此等の事實を綜合して、康居

は Turk 種ならんと推測す。

康居の東方に位し、天山の北麓、伊犁の上流域及び熱海の近傍に據れる民族を烏孫とす。余輩は嘗て烏孫考を著はし、その Hittite 種に屬すべきを論證せり。今試にその論點の要旨を述べんに、此國の王を昆莫といひ、又貴人の名稱に多く某の靡とあるは、共に Turk 語なること、又この國の始祖昆莫が狼に煦育せられたりといふ傳説は、後世高車、突厥の如き Turk 民族の間に行はれたる狼傳説と最も類似すといふにありき。而して烏孫の名稱が Turk 語 *sonu* の對音にて、長の義と解釋し得らるゝも、亦此民族の Turk 種たるべき一證となすに足るべし。此の如く烏孫の言語が Turk 語にて解釋せらるゝにも拘はらず、猶世の學者が此民族の種類に就いて、半信半疑の間に彷徨する所以のものは、蓋し顔師古が烏孫について「烏孫於西域諸戎、其形最異、今之胡人青眼赤鬚、狀類彌猴者、本其種也」といへるに因るなるべし。漢代の烏孫が果して顔師古のいふが如くんば、烏孫は明かに Arya 種にして、Turk 種にあらざるなり。然れども顔師古は唐代の初に生まれ、烏孫が西域に滅絶してより已に多くの年所を経たり。氏は如何にして唐代の青眼赤鬚の胡人が、漢代の烏孫なりしを知りしか。氏が當時の胡人を以て烏孫に比す。是れ固より一家の私見にして、古記に據れるにあらざるや明かなり。史記漢書が大宛以西の胡人に就いては、その深目高鼻なるを明記せるにも拘はらず、烏孫に關しては一言の之に及ぶなきは何ぞや。想ふに此民族は Turk 種なりしかば、敢て漢人の注目する所とならざりしが故なるべし。

烏孫が天山熱海の間に據りしは紀元前二世紀の頃にして、その以前此地は塞種の占領せし所なり。その徴は漢書の西域傳烏孫の條に、本塞地、大月氏、西破走塞王、塞王南越縣度、大月氏居其地、後烏孫昆莫擊破大月氏、大月氏徙西、臣大夏、而烏孫昆莫居之、故烏孫民有塞種、大月氏種云とあり、又同書屬賓の條に、昔匈奴破大月氏、大月氏西君大夏、而塞王南君屬賓、塞種分散、往々爲數國、自疏勒以西北、休循、捐毒之屬、皆故塞種也とある是なり。さて大月氏が匈奴に逐はれて燉煌祁連の間を去りしは、匈奴の老上單于の代にあれば、塞種が大月氏を避けてその地を放棄せしは、紀元前二世の前半にありしは確かなり。Smithは此年限を紀元前百六十五年より百四十年の間にあると考定せり。又漢書西域傳補注を案ずるに、按梁荀濟論佛教表云、漢書西域傳塞種本允姓之戎、世居敦煌、爲月氏逐、遂往葱嶺南奔と見えたり。荀濟の見たる漢書に塞種は世々敦煌即ち今の沙州に居りしとあれど、現今の傳本にはさる文なし。若しも荀濟時代の漢書に果して此の如き記事ありしとせば、塞種は天山方面より沙州の邊まで蔓延せしものと見做さるべからず。漢書の文によるときは、塞種が始めて葱嶺を越へて南遷せしは、紀元前二世紀にありしと見ゆれど、之を西方の記録に徴するに、その決して然らざりしを知る。露國の東洋學者 Grigorič 氏はその著作塞種考 (O. Kirdekovs, Hapodjio Cakazb) に於いて、塞種に關する東西の記録を引用し、最も該博を極めたれば、余輩は先づ此書によりてギリシヤ、羅馬、波斯、印度の古書、刻文に見えたる此民族の記載を略叙し、而して後その原住地及び種類を推測せんと欲す。

ギリシヤの學者 Chelias は Saka (即ち塞) 人が Darius 王に従つて、ギリシヤ人と戦へることを記せり。此人は詩伯 Aeschylus と同時代の人なれば、Saka の名がギリシヤの記録に見えたるは、之れを以て最初とすべし。次に Herodotos は波斯王 Cyrus の時に於ける東洋の大國を擧げて、Babylonia, Bactria, Saka 及び Egypt の四國なりとす。又波斯王 Xerxes のギリシヤ征討の軍に参加せし Saka 人の事を記したる處に、此 Saka 人は元來は Skythai-Amougio 人なれど、之を Saka と稱する理由は如何とす。波斯人は Skythai を凡て Saka と呼びたればなりと云へり。然れば當時波斯にては Saka と稱するは北狄の總名にて、宛もギリシヤ人が凡て東北の夷狄を Skythai と稱せしが如きものならんが、又時としては或る特殊の民族を Saka と呼びしものと思ほしく、Herodotos が Darius 王の太守管域を列擧せる處に、Saka と Caspi とを以て第十五管域と定めたり。此の Caspi が Ptolomaeus の Casia と同名にて、今の Taskirgan なるは、前段に述べたる如くなれば、此と連結せられたる Saka が北狄の汎稱にあらずして、或る特殊の民族を指したるは明白なり。又 Darius Hytaspas 王の時に成れる Naksch-i-Rustam の碑文に Saka の三部族として Saka-haunavaragā, Saka-tigrakhuda, Saka-tyrai-taradaryas の名を擧げたり。この中 Saka-haunavaragā は Herodotos に見えたる Skythai-Amougioi と同一なるべければ、此碑文に謂ふ所の Saka は汎稱なるべし。然るに同王の時に撰ばれたる Persepolis の碑文に波斯王に隸屬せる邦國民族の名を列擧せる處には、Saka を Gandhara の次に置き、又 Barystam の碑文には之を Sogda と Satavaga との間に記せり。Gandhara は今の Peshawar を中心として Panjab, Kabulistan 等

包容せる印度河の中流域に當り、Sogdia は Syr Amu 兩河の間即ち Sogdiana なれば、Saka が此等の地と隣接せる特殊の民族を指し、は確かなり。此等の碑文に見えたる Saka に就いては、已に西人の精細なる考證を経たれば、今は總て省略に従ふべし。たゞ試にその結論を述べんか、Saka は始め特殊の民族をいふ名なりしが、後には漸く北狄を指す汎稱となれること、此民族元來の位地は波斯より東北に位せしこと、此民族は一時 Darius 王の領屬となりしが、後に叛亂してその討伐を蒙りしこと等は、此等の碑文によりて推測し得べき事實なりとす。

Alexandros 大王の後に於ては、Girgishan 人の中 Saka の事を記したるもの數人あり。その中 Megasthenes の云ふ所によれば、印度は北方に於て Enodon 山脈を以て Saka と稱する Skythis 人と隣接すとす。Iranoshenes に従へば、印度は北方に於て Saka, Sogd 及び Bactria の一部分と土壤を交へ、又 Saka と Sogd との間には Jaxartes 河ありて之れを分割すとす。Scilly の Diodorus は Saka を以て Massagetæ と均しく Skythai 種の一部なりと爲し、Strabon の一節によれば、Jaxartes 河が Saka と Sogd とを分割するは、猶 Oxus 河が Sogd と Bactria とを截斷するが如しとす。又一節によれば、Girgishan 人は從來北方の民族を一括して Skythai 或は Kelakythai と稱すれど、Caspian 海の東方に住する民族に限り、之を Saka 及び Massagetæ に區別して混同せずとす。又一節によれば、Caspian 海の背後に住する民族の大部分は Dairi なれど、其より更に東方に據れる民族は Massagetæ と Saka となり。自餘の民族にも各々名號あれども、Girgishan 人は總て之を Skythai と呼ぶ。Girgishan 人の建設せる Bactria 國を略奪せるは、Asii, Pasiani, Tokliana 及

び Sakaraviti と稱する種族にして、何れも Jaxartes 河の背後に住し、Saka と Sogd とが接觸せる處より南下し來れりといへり。紀元後に於いて Saka 民族の事を書き記したるギリシヤの學者は、Arrian、Dionisius Periegetes、Ptolemaeus、Klement Alexandros 及び Eilian なりとす。その中 Arrian は Alexandros 大王が討平せる民族を擧げたる處に、Saka と Bactria の次に記し、Periegetes は Saka と Sogd の背後 Jaxartes 河の沿岸に擬し、その東方に Tokhara Phrum 及び Sores を置ち、Ptolemaeus は之を Sogdiana の東 Imaos 山脈の西 Komeda の高原地に當て、又 Eilian によれば、Saka は特殊の言語を有し、他の Skythai 人と異れりとあり。更に翻て印度の記録を案ずるに、Saka の名は亦 Ramayana、Mahabharata、Manu の法典などに散見す。その中 Manu の法典には Saka と Parada、Pahlana の前、Kambodja、Java 後に記し、又 Mahabharata は Yudistira 王に朝貢せる邦國の中に、Saka と共に Tokhara 及び Kanika を擧げたり。

以上列擧せる西方の記録によりて、Saka 民族の方位を推測するに、葱嶺及び Jaxartes 河の背後は此民族の領域と思はるゝが故に、漢書が塞種の住地として示せる所と殆ど大差なきを知るべし。但し漢書は塞種が始めて天山を去て葱嶺及び屬賓に遷れる年代を紀元前二世紀と爲せど、之を西方の記録に徴するに、此民族が葱嶺に據り、此處より更に南下しては印度に侵入し、西轉しては Bactria、Sogdiana の地に突出せしことの甚だ悠遠の古代にありしを察すべし。果して然らば塞種の本據地はこの範圍に於いて何地に求むべきか。天山なりしか、葱嶺なりしか、將たまた此兩處に亘りしか。是れ更に考究を要する問題なり。從來の東

洋學者は大概 Saka を以て Arya 種と思惟せしが故に、その本地を兎角葱嶺の間に置かんとする傾向あり。Tomasehek 氏が現今尙ほ此山地に住する Galca 民族を以て Saka の苗裔なりと爲すが如きは、その一例なり。然れども Saka が Arya 種なるか否かは、確實なる證明を待て始めて決せらるべき問題にして、未だ定論となれるものにあらず。Grigorieff 氏は Saka 語を解釋して之を Slav 種なりと推定し、Grenard 氏も亦同様の方法によりて之を Iran 種ならんと臆測せり (Mission scientifique dans la Haute Asie, I, pp. 33-34)。然れども Saka の名は前にも述べたる如く、波斯にては北狄の總稱と變じたれば、その所謂 Saka なるものは必しも純粹の Saka 種のみにあらずして、中には廣汎の意味に於ける Saka 即ち Arya 種をも含有せしなり。例へば Strabon の地理志 (XI, 8) に、Khāresmia 人は Massagetæ 及び Saka の一部分を構成すとあるが如きは即ちその一證にて、Khāresmia 人は Iran 種なるに疑なければ、此處にいふ所の Saka が Iran 人を包含せる總稱なりしは明白なり。然れば今日の學者が Saka 語なりと提出して解釋を試みたる言も、實は純粹の Saka 語にあらずして、還て Iran 語なるもあるべければ、此等の語がよしや Arya 系統のものなりとするも、未だ之を以て Saka 種は Arya 種なりと斷定すべからず。且つまた Saka は Jaxartes 河の北方より南遷して、葱嶺及び河間の地を領有せしことあれば、その領内の人名地名には Iran 語もあり、又之を借用したるもあり得べければ、此等の名稱を以て直に Saka の種類と判定するは、甚だ危険なりと謂はざるべからず。漢土の記録に大月氏の言語として擧げたるものが、實は Iran 語にして大月氏の言語にあらざるものあり。例へ

ば杜氏通典卷百九 大月氏の條下に引用せる注に、女中記馬腦出大月氏、又有牛名曰日及、今日取其肉、明日瘡愈」とあるが如き即ち是なり。若しも此文を卒爾に讀まんものは、或は日及を以て大月氏語なりと思ふべけれど、精細に之を比較研究せんか、その大月氏語にあらずして實は此民族に服屬せるIran種の言語なるを悟るべし。Wakhan語にては牝牛を *seh-ghii* とし、*Sari-kol* 語にては之を *seh-gan* とす (Tomasechek, *Centralasiatische Studien*, II, p.764)。想ふに大月氏の日及 (*Yaf-kup, gaf-kup*) は上の *seh-ghii* の對音にて、今日 Wakhan 語に遣れる Iran 語なるべし。大月氏が天山より Bactria に侵入して此地の Iran 人を領有せしは、宛も Saka が同方面より南下して葱嶺及び河間の Iran 人を服從せしめたると同様なれば、大月氏の種類が新領地の土言にて判定すること能はざるが如く、Saka 種の系統は亦その已に汎稱となれる Saka の言語にては推測すべからず。

Saka 種族が太古より中央亞細亞に活動せし大國民なりしは、Herodotos が東方の大國として Egypt, Babylonia, Bactria の外にこの Saka を挙げたるにても察すべければ、此の如き強盛の民族が葱嶺の如き寒氣嚴烈の瘠地に崛起せしとは考へられず。又之を後世の史乘に徴するも、西域諸國に侵入せる突厥諸族の根據地が常に天山の溪谷或は Alexander 山脈の北麓 Kirgiz の曠野に在りしを思へば、太古の Saka 即ち塞種も亦この方面に據りし Turk 種と見るを穩當とすべし。塞種が漢代に大月氏の逐ふ所となりて南遷せるものゝ中、葱嶺に據りし部族が、休循捐毒の諸國を爲し、ことは漢書の記載する所なり、又南北朝の頃に塞種の故地に

據りし烏孫が東方より蠕々の壓迫を受けて葱嶺の山中に移遷せしは、魏書の明載する所なり。今此等の事實によりて之を觀るも、Tasartes 河の背後天山の北麓は塞種の本地たりしを察知すべきなり。塞種の言語は後世に傳はらざれば、此方面より此民族の種類を積極的に證明すること能はず。然れども Saka 即ち塞の名は Turk 語にて解釋せられざるにあらず。周書^{卷五}の突厥傳を案ずるに、或云突厥之先出於索國在匈奴之北と見えたり。此索國が古の塞種なるか否かは固より明かならざれども、索字の古音は sak なれば、塞種の名と同じかりしやも知るべからず。又 Jakut-Turk 人は自ら稱して Saka と云ふ。Radloff 氏によればこの Saka は Turk 語 jaka と同語にて人の義なりと云ふ (Die Jakutische Sprache in ihrem Verhältnisse zu den Türkisprachen, p. 53)。想ふに塞即ち Saka の名は Jakut 語の Saka と同語にて、亦人の義にはあらざりしか。又漢書西域傳によれば葱嶺の南 Dardistan に該當する處に難兜と稱する國あり。Dardā の名は Mahābhārata の如き印度の古書にも見えて此地元來の名稱なれば、漢書に之を難兜といふは新規の國號なるべし。漢書の張騫傳を案ずるに烏孫國の始祖昆莫の父を難兜靡といふ。而して烏孫語にては君主、貴人の敬稱を靡(Ṣ)といへば難兜は此人の實名にて、Dardā 國の別稱と同一なり。烏孫は Turk 種なれば、難兜靡は Turk 語なるべきが、Dardā 人は Arya 種なるに、その國號の Turk 語なりしは如何に解釋すべきか。想ふに塞種が天山より南下して屬賓國に伐ち入りし時に、その一部は Dardā 國を占領し、之にその酋長などの名稱を取て此國を難兜と命名せしなるべし。而して此塞種の國號が烏孫語と同一なりしは、

また以て塞人の「*Türk*種なりし一證となすべし。

既に前にも述べたる如く、*Tarim*盆地の住民は *Arya*種を骨子として之に *Tatar*種を加味せるものなり。然らばこの「*Tatar*種は何れの方面より此盆地に流入せしものなるべし。天山北道に當る漢代の城郭諸國の名稱が多く「*Türk*語にて解釋せらるゝはこの疑問に對して答案を與ふるものにあらざるなきか。漢書の西域傳によれば今の *Kashgar*を漢代に疏勒とすべし。 *Türk*語にては水を *su*とすひ水の存するを *srük*とす。 *Kashgar*の地たる水草美好なるが故に、此名を得たるものなるべし (Watters, *On Yuan Chwang*, vol. II, p. 201)。又今日の *Üch-turfan*を漢書に溫宿とすひ唐書には于祝と記せり。 *Türk*語にては *üch*とすべしは溫宿于祝はその對音なるべし (P. Palliot, *La Ville de Balkhoun dans la géographie d'Idrîsî*, *T'oung pao* Vol. 7, p. 554, Note 7)。今日の *Aksu*を漢書に姑墨とすひ玄奘の西域記には此國を跋祿迦と書けり。跋祿迦は梵語 *baluka*の音譯にて沙土の義なれば Watters 氏は漢代の姑墨は *Türk*語 *kum*の對音にて *baluka*と同義なりと考定せり (On *Yuan Chwang* vol I, p. 65)。 *Türk*語族の中 *Altai*語 *Schor*語 *Ögätai*語に於て *kumak*とすべし *Kirgiz*語に於て *kuim*とすべし (Radloff, Versuch eines Wörterbuches der *Türk-Dialecte*, p. 1043)。 *Tobolsk*語 *Kusnez*語に於て *kumak* *Yakut*語に *kumach* *Kumak*とすべし。 (Klaproth, A. P. XXXV) 因て案ずるに姑墨は *Türk*語 *kum*の對音とせらるべし。蒙古語にて細沙沙粒水中の塵土を *komak* 或は *komaghi*とすべし (Kowal, pp. 982, 983) *Solon*語にて *sa*とす (*sar*) *khomngé*とすべし亦同語なり (Iwan, p. 68, a)。又今の *Kara*

Sahr の地を漢代に焉耆といへり。此國名は今の甘肅省の西部南山脈中にありし漢代の焉耆山と同名なり。此名稱が Turk 語の *ong' ungn'* 蒙古語の *ongo ungn'* の對音にて顔色紅紛花紛英英の義なること焉支山の條下に詳説せる如し。西域記に之を阿耆尼といへるは梵語火をいふ *agni* の音譯にて土言焉耆を梵語に附會したる雅名なり。Watters 氏は焉耆を Turk 語 *yanghi* の對音にて火の義なりと説けど如何にや(6) Turk 語にては火を *ot' nod* などいへど音で *yanghi* といふを聞かず。 *yanghi* とは此國語にて新の義なり。釋迦方誌に焉耆を鳥耆に作り佛國記に之を僞夷に作るは共に焉耆の誤寫なりと知るべし。又後漢書卷八の西域傳によれば今の哈密を後漢時代に伊吾盧と稱せり。唐代に至りて之を伊州伊吾縣といへるは共に伊吾盧の名に取れるなり。Klaproth 氏はこの伊吾盧を *Uigur* の對音と思惟せり。然れども回鶻が新疆省に移遷し來りしは五代より宋朝にかけての事にて漢代に於ては尙 *Baikal* 湖の南 *Selenga* の流域に留まりしならん。されば漢代の伊吾盧は唐代の回鶻宋代の畏兀兒に比すべきものにあられれどその名は或は *ugur* の對音なりしやも知るべからず。 *Abughaz* によれば *Uigur* とは Turk 語にて團結して援助すと云ふ意義なりと云ふ (Klap. Die Sprache u. Schrift der Uiguren. p. 39)。然らざれば *Ugatai* 語にては捏ねる混和する堅くするを *yoghur* 或は *yughr' u' s' y'*。 (Seix Sulejman Effendi's Gagatai-Osmanisches Wörterbuch. p. 107. Schaw. A vocabulary of the Language of Eastern Turkestan. p. 203) 而して庫車の東方に位する *Bugur* や *Yü-gur* と *u' s' i' i'* 甘肅省に往する (Saro) *Togur* の名も均しく上の *yughur. yoghur* と同語なるべし。

(Mannerheim, A Visit to the Sarı Yöğür and Shero yöğür, Jour de la Société finno-ougrienne XXVIII, 72.) 又東Turkistan 語にては種馬を *aigur* とす。Karsähr の附近に *Aigür Taghi* と呼ぶ山脈あり。Tawarik-i-Rashidi によれば Lob Nôr のあたりにも Sarigh Aigür と稱する處ありとす。(Shaw, p. 117) 因て察するに漢代の伊吾盧は此の Yughur yöğür 或は *aigür* の對音にしてその Turk 語たるに於て疑なかるべし。Ptolemaeus の Serica 國の地理には今の Tarim 河を Olkhard と記せり。Yule 氏が之を Turk 語の Uğur と考定せしより殆ど學界の定説となれる觀あれど Uighur 人が此盆地に移轉し來れるは後世の事に屬すればこの Olkhard は上に記せる Yughur 或は *aigür* に比するを穩當とすべからか。然れども更に考ふるに Ptolemaeus が Serica の地名として記せるものは多く Iran 語或は他の Indo-Europa 語と覺しく實際の名稱と照合せらるるものあり。それは Olkhard の如きも亦 Iran 語などにて解釋するを至當とすべからか。Wakhan 語にては水を *yapk Sangic* 語にては *wik Citral* 語にては *uk ugh Mingian* 語にては *yagha* とす。又 Wakhan 語にては飛塵を *gard Mingian* 語にては *gharai* とす。又 (Tomasehek, Centralasiatische Studien, II, p. 756) Olkhard を蓋し *ugh-i-gard* [*u(gh)-i-gard*] などの轉訛にして飛塵の水即ち流沙河の義なるべし。漢代に Tarim 河が何と呼ばれけん漢史記などにその名を擧げざれば之を知るに由なけれど南北朝時代に此河水が達利水樹枝水計式水と稱せられしは左に引ける例證によりて之を見るべし。

魏書 卷百 西域傳于闐の條に曰く城東二十里有大水北流號樹枝水即黃河也一名計式水

城西五十五里亦有大水名達利水與樹枝水合俱北流。

周書^{卷五} 異域傳于闐の條に曰く、城東三十里有首拔河、城東二十里有大水北流、號樹枝水、即黃河也、城西十五里亦有大水名達利水、與樹枝俱北流、同會於計戍。

北史^{卷九} 西域傳于闐の條に曰く、城東三十里有首拔河、……城東二十里有大水北流、號樹枝水、即黃河也、一名計戍水、城西十五里亦有大水名達利水、與樹枝水會俱北流。

さて上文に見えたる諸水の中、魏書の計戍水及び周書の計戍水は通典に計首水とあると同名にして、和蘭より北流する Yumug Kas Kara Kas 河を指し、計戍計首は共に Turk 語 Kas の對音にて玉なり。故に梁書西北諸戎傳^{卷五} 于闐の條に國有大水出玉、各曰玉河とあるは、この計戍水をいへるなり。又 Tibet 語にては玉を *g* といい、河を *sa* といへば、魏書周書の樹枝水は Solju の對音にて、亦玉河の土言なるべし。果して然らば北史に首拔河とあるは、首枝水の誤寫なるべし。又上文に見えたる達利水は明かに Farin の對音なり。その意義は欽定河源紀略^{卷三}に、今回部語謂沃野可耕之地爲塔里木とあり。又同書^{卷九} 塔里木河の注に、回語塔里木謂宜於耕種之地、河旁腴可耕種、故名、即西域大河也とあり、又 Shaw 氏の字彙によれば、farin は東 Turkestan 語にて耕作せられたるの義なり。(A Vocabulary of the Language of Eastern Turkestan, p. 63)

此の如く上代に於ける Farin 盆地の中殊に天山南麓に位する城郭國の名稱が Turk 語にて解釋せらるゝは、即ち此地域に Turk 民族の住居せるを證明するものなり。然れども魏書

百五の西域傳干闥の條に、自高昌以西諸國人多深目高鼻とあり、又西域記^{卷十} 佉沙國の條に容貌麤鄙、文身綠睛とある文によりて之を察するに、少くとも Turian より Kaslgar に至る天山南の地に、Arya 種の多く混入せるを見るべければ、此地を以て Turk 種の本土とは爲し難し。史記漢書は大宛以西の人民が深目にして鬚髯の多きを明記せるに、反して葱嶺以東の土人に就て一言の之に及ぶなきは頗る怪むべきに似たれど、漢代より以後南北朝に至る間に、Arya 種の民族が新に天山の南方に侵入せる歴史上の事實もなければ、此方面に於ける人種上の状態は漢代と雖も南北朝時代と大差なかりしを思ふべし。此の如く天山南の住民が血統上に於いて複雑なりしは、太古より Arya 人は葱嶺より東進し、Fert 人は天山より南下して共に此地に於いて混合融和せし結果に外ならず。而して此事實たる一面に於いて葱嶺が元來 Galcia 人の如き Arya 種の占領せる處なりしを語ると共に、又一面に於いては天山以北が Turk 民族の搖籃地たるを證するものなり。而して天山以北及び Jaxartes 河の背後に Saka 種の據りしは東西の記録の一致する所なれば、此民族の Turk 種なるべきも、從て亦推知せらるゝなり。

以上縷々論證せる如く、天山以北及び Kizil の曠野が Turk 種の本地なりしは、之を上代に於ける人種配布の點より考へ、又之を此地域に於ける言語に徴して、殆どまた疑を容れざる所とす。而して此民族が太古より南下して、或は Fergana の盆地に、或は葱嶺の高原に、或は河間の沃地に侵入せしことも、史上に明徴あり。是に於てか余輩が劈頭に提出し置きたる Casia

或は Caspi 國に關する疑問は容易に解決せらるべし。想ふに此國たる今の Sari-kol にしてその土人は Iran 種なりしが、紀元前五六世紀の頃には既に北方より侵來せる Turk 人に征服せられ、その王侯貴人は此人種に屬せしかば、國號の如きも Turk 語に従つて Casia 或は Caspi と稱せられしなるべし。

塞及び烏孫の Turk 種なるに就いては、以上論證せる所にて殆んど盡されたりと信ずるが故に、次に考究を要するは大月氏の種類問題なりとす。Klaproth 氏が一千八百二十六にその名著 *Tableaux historiques de l'Asie* に於いて大月氏を西藏種と考定せしより、此説は長く學界を風靡し、Ritter, Vivien de St-Martin, Richthofen 等の大家相繼て之を遵奉せしかば、現時に至りても尙此説は或る學者の間に生命を維持するが如し。然らば何が故に Klaproth 氏は大月氏を西藏種と推定せしかと考ふるに、蓋しその理由とする所は後漢書^{卷八}の西羌傳に「湟中月氏胡其先大月氏之別也、舊在張掖酒泉地、月氏王爲匈奴所殺、餘種分散、西踰葱嶺、其羸弱者南入山阻、依諸羌居止、遂與共婚姻、及驃騎將軍霍去病破匈奴、取西河地、開湟中、於是月氏來降、與漢人錯居、雖依附縣官、而首施兩端、其從漢兵戰鬪、隨勢強弱、被服飲食言語、略與羌同、亦以父名母姓爲種、其大種有七、勝兵分九千餘人、分在湟中及令居、又數百戶在張掖、曰義從胡」とあり、魏志^{卷三}烏丸鮮卑東夷傳に引用せる魏略に「燉煌西域南山中從罽羌西至葱嶺數千里、有月氏餘種、葱莖羌白馬黃牛羌、各有酋豪」とあり、又魏書^{卷百}の西域傳小月氏國の條に「其先居西平張掖之間、被服頗與羌同、其俗以金銀爲貨、隨畜牧、移徙亦類匈奴」とある文に存するなるべし。然れども小月

氏が西藏種たる羌と風俗言語を同じうせしは、已に Franke 氏が説けるが如く、此種族が諸羌と長く雜居結婚せしが故なるべければ、南山の羌を保ちし小月氏を以て大月氏の種類を判定すること能はず。(Zur Kenntnis der Türkvolker und Skythen Zentralasiens. p. 27) 又魏略の引用せる西戎傳には月氏を月氏に作るを以て或は之を根據として月氏は氏羌の一種なりと思惟するものあらんかなれど月氏はまた月支とも書けば西戎傳の月氏は明かに月氏の誤寫なりと知るべし。此の如く月氏を以て西藏種と爲す證據の薄弱なるに於いては、此民族の種類問題は尙ほ未定に屬すと謂はざるべからず。然れども月氏と密接して燉煌祁連の間に游牧せし烏孫が既に Turk 種なりと證明せられ、又その東隣國にして從來 Turk 種なりと信ぜられたる匈奴が蒙古種たるに於いては、此民族と劃然と區別せられたる月氏が Turk 種なるべきは自ら推測せらるべし。月氏の言語は烏孫の如く後世に傳はらざれば、此方面より此民族の種類を考察すること能はざれど、彼等が印度の地に於いて鑄造せし貨幣にはその王の肖像を鏤刻したれば、その風彩骨相に徴して、その種類を鑑定するを得べし。此貨幣に現はれる大月氏王の面貌は固より一様ならざれど、而も概して之れを云へば、高額隆鼻にして、其鼻梁の鈎曲せる處は Shen 種に類似し、口唇は厚くして鬚髯多し。Ujaly 氏は此容貌を評して「Tatar 式にして蒙古式ならずと云へり (Mémoire sur les Huns blancs. L'Anthropologie. T. IX. pp. 391-395) 大月氏王の隆鼻にして鬚髯多きの故を以て或は之を Aryar 種と爲し Tatar 即ち Turk 種ならずと主張するものあらんが、Turkman 人に鬚髯の多きはよく人の知る所なり。且つ

Ufalvy 氏の言によれば Turco-tatar 種は元來蒙古及び Arya 二種の混合なるが故に、Turk 種の中に Arya 種の骨相を有するは怪むに足らずと (p. 404)。又 Almasý 氏に従へば純粹の Turk 種の相貌には Kankasus 種に類似するものあり。例へばその鼻梁の鈎曲して所謂 Asytoride 式なるは Turk 人の間に多く見らるゝ骨相にして中にはその隣民族の何れにも類似せざる非蒙古式の容貌を有するものありと云へり。(Centralasien, die Urheimath der Turkvölker. Revue orientale III, p. 202) 余輩は此等の學者の所説に信賴して、大月氏は Turk 種に屬する民族なりと斷定せんと欲す。而して此推測の誤らざるは、大月氏に關する他の歴史上の事實が之と契合するにて證すべし。

西域の大夏國を滅ぼし、は、大月氏なりとは、漢書の記す所にして、ギリシヤ人の建設せる Bactria 國を併し、は、Tokhára なりとは、Strabon の語る所なり。而して漢史の大夏は即ち西史の Bactria なるに於ては、毫末の疑なきを以て、Richhofen 氏は大月氏は即ち Tokhára なりと斷定せり。然れども漢書は大月氏の故地を燉煌祁連の間、即ち今の甘肅省の西部に在りと爲せるに反して、玄奘は都貨邏 (Tokhára) の故國を今の和闐の東南山脈の北麓に擬せしこと、西域記卷十に罽薩旦那 (和闐) の尼攘城を叙したる後に、行四百餘里、至都貨邏故國、國久空曠、城皆荒蕪、從此東行六百餘里、至折摩歇那故國、即沮末地、城郭歸然、人煙斷絕、復東北行千餘里、至納縛波故國、即樓蘭地也とあるにて證すべし。是に於いて Richhofen 氏は此二書の矛盾を融和一致せしめんと欲し、之が説を爲して曰はく、大月氏は元と玄奘の所謂都貨邏の故國に居りしが其

地沙漠の侵害する所となりて、住居するに適せざりしかば、更に東方に轉じて、今の沙州に移遷せしなりと(China, I, p. 440)。氏は Vivien de St. Martin 氏の説を奉じて、大月氏を西藏種と思惟せし一人なれば、此民族の故地を和闐の東、南山脈の北に置いて敢て之を怪まざりしならんが、此民族が既に「*Yueh-chih*」種なりと證せられたるに於いても、尙ほ此地方を以てその故國と見做すを得べきや否や。余輩は先づ東西の記録を参考して、上代に於ける此方面の人種の状態關係を一瞥すべし。

燉煌の西南より葱嶺に至る南山脈の南北が「*Yueh-chih*」種に屬する大月氏の故地なりしや否やを知らんと欲せば、漢書が此方面の民族に就いて記載する所を考察する必要あり。この書の西域傳によれば、陽關の西南に據れる民族を「*Yueh-chih*」種といふ。其文に曰はく、「*Yueh-chih*」種は王去陽關千八百里、去長安六千三百里、辟在西南、不當孔道、戸四百五十、口千七百五十、勝兵者五百人、西與且末接、隨畜逐水草、不田作、仰鄯善、且末、穀山有鐵、自作兵、有弓矛、服刀劍甲、西北至鄯善、乃當道云」と。此文面によるときは、*Yueh-chih* 種が今の「*Yueh-chih*」種に據れる西藏種の游牧民族なりしは明白なり。然るに西域傳は「*Saridam*」以西葱嶺に至る山間に住せる「*Saridam*」種を亦「*Yueh-chih*」種と稱せり。その徴は且末の西に位する小宛國の條に、東與「*Saridam*」種接、辟南不當道」となり、又此國の西に方る戎盧國の條に、東與小宛、南與「*Saridam*」種、西與渠勒接、辟南不當道」とあり、又此國の西に接する渠勒國の條に、東與戎盧、西與「*Saridam*」種、北與扞彌接」といひ、又于闐の條に、南與「*Saridam*」種接」といへるにて知るべし。漢人はまた葱嶺の南「*Kashmir*」國の北「*Balistan*」に據れる西藏種をも「*Yueh-chih*」種とさへるは、

西域傳難兜國の條に「南與婁羌接」と見えたるにて證すべし。此の如く漢書西域傳に婁羌と稱するものゝ範圍は廣大なれど、此民族の本土が Tsaidam の地に限られたるは、同書に記せる戶口勝兵の員數に考へ、又此國が西北に於いて且末鄯善と土壤を接せしに徴して明かなり。且つ西藏語にては鹽を tswa tsah chha Gyārum 語に chhe Takka 語に tsá Thochu 語に chej Serpa 語に ohá Gyūmng 語 Mírmi 語に choohá Magar 語に chá Bhítani 語に ohá とすべし (Hunter. The Non-Aryan Languages. p. 152.) 婁羌の婁は此言の對音にて鹽の義なるべし。婁字今の官話音は ch'o なれど、温州音にて ch'a 寧波音にて ch'ah 韓字音にて chak 國字音にて zaku なる上に、また西域傳婁羌の音注に「師古曰音而遮反」とあれば、婁字漢代の發音は cha 或は za にして、西藏語の tsah chha の譯字としては最も適切なるを見る。又西藏語にて鐵を ohhyá Serpa 語にて ohhyá Horpa 語にて ohú Bhūtan 語にて ohýá とすべし (Hunter. p. 136.) 婁羌の稱は此言の對音にて國中に鐵を産するによりて、其名を得たりとも思はれざるにあらず。然れども Tsaidam の平原が鹽地なるは既に西人の探檢踏査によりて顯著なる事實なり。(Sven Hedin, Geographisch-wissenschaftlichen Ergebnisse meiner Reisen in Zentralasien 1894-1897. p. 318.) 而して Tsaidam はまた Tsaidam Tsaidam とも、又「西藏語族の tsaidam 蒲荻の二語より成れる名稱にて、鹽澤沮洳の地に蒲荻の繁茂するよりその名を得たりと思はるれば、此地域に據れる婁羌の號は寧ろ鹽地の羌と解するを穩當とすべし。此如く Tsaidam が婁羌の本地なるべきは、之を漢書西域傳の文面に照し、又之を此國號の意義より見ても明瞭なるに、同書は何故に Tsaidam 以西 Balūtan に亘る西藏種をも亦

罽羌を稱するか。想ふに南山脈以南に住する西藏種族の中罽羌は西南に僻して西域の孔道に當らざりしと雖も、而も此地たる漢國の門戸たる陽關玉門關に接近し、又張騫が匈奴に遮られたる時に道を罽羌に取りて歸國せし例などもあれば、漢人は親しく此國を目撃してその名稱をも知りたるなり。然るに此國より以西に住せる西藏種には接觸する機會を得ず、たゞ其罽羌の類族なるを傳聞するに止まりしかば、漢人は假りに之を罽羌と呼びしならん。尤も西藏種族の中にも漢人に知られたる者は罽羌の外にまた子合(西夜)蒲犁、依耐、無雷の四國あり。而して此四國が西藏種なるは西域傳西夜國の條に蒲犁及依耐無雷國皆西夜類也、西夜與胡異其種類羌氏行國隨畜逐水草往來とあるにて知るべし。而して此四國或は五國が漢人に知られたるは莎車即ち Yarkand より葱嶺に登る孔道に當りしが故なり。又子合、西夜の南に位せし漢代の烏秣國(正しくは烏秣國)即魏代の于摩國も亦氏羌の一種なるべきは、此國名の西藏語系の言語にて解釋せらるゝにて察せらる。Munyak 語にては石を woli Horpa 語にて (r) gāne' Gūnung 語にて yuma' Mūmi 語にて yūmbi と S' k' b' (Hunter, p. 157) 烏秣于摩は上の yuma の對音にて石の義なるべし。西域傳烏秣國の條を案ずるに、山居田石間、有白草、累石爲室とあれば、此國に巖石の多かりしことも想像せせられ、その國號の石に因めるも亦偶然にあらず。若しも此解釋に誤なくんば、烏秣國も亦西夜子合等と同種にて西藏の種類なるべし。清朝の學者徐松は漢書西域傳補注に於いて、前掲西夜の條に西夜與胡異とあるに注して、臣贊武帝紀注、渠犂西域胡國名、是漢時名西域爲胡故、後梁冀傳、馬援傳皆稱西域、賈胡說文

謂之西胡段氏曰說文西胡三見言西胡以別匈奴之北胡といひて徐松は漢書の胡を以て當時の西域即ち今のTarinの盆地に住せる土人を指しゝのと解したり。既に徐松の考證によりても知らるゝが如く胡の名は後漢時代より以降は外夷をいふ汎稱と變じたれど漢書及び史記にいふ所の胡は専ら匈奴を目せしなり。故に漢書西域傳に婼羌國の王號を去胡來王をいへるは匈奴を去りて漢に歸來せるの謂にして當時の胡が専ら匈奴を指しゝを察すべし。されば西域傳に西夜が胡と異れりとは即ち匈奴と異れりといふ義にて決して此氏羌種族がTarinの盆地に住せる土人と異れりといふ意にあらず。

以上陳述せる如く漢書の西域傳の文を考察し來れば西藏種族は前漢時代に於て沙州の南 Tsaidam の地より葱嶺に至る南山脈の溪谷及び葱嶺の東側面にては Yarkand の西より Tashkungan に至る Yarkand 河の南方に蔓延せるを知るべし。而して Yarkand より以北に西藏種族の住居せしや否やは明かならざれども魏書^{卷百}の西域傳疏勒(Kashgar)の條に入手足皆六指産子非六指者即不育とあり又杜氏通典同國の條に其王手足皆六指産子非六指即不育とある如く Kashgar 國の土人に關する畸形の記事は此國人に西藏種の混合せるを證するものにあらずるなきか。Rookhill 氏が西藏人の體格を記載したる處に西藏にて觀察せるものゝ中最も普通に見受けらるゝ畸形は六指にて通常は拇指の傍より分出すれどまた時としては手掌の中小指に密接せる處より發出す。此畸形は亦支那にも存すと見えたり。生理學者の言によれば斯る畸形は遺傳性のものなりといへば此の一事を以て疏勒國に西

藏種の混入を認むるも決して不可なかるべし。然れども既に前にも述べたるが如く、疏勒の名はTurk語の *Suluk* の對音にて水あるの義なれば、此處にTurk人の住居せるを證すと共に、唐書西域傳疏勒の條に「其人文身碧瞳」とあり、又西域記佉沙國の條に「容貌麤鄙文身綠睛」とあれば、此土人にArya種の存するを認むべし。之を要するに疏勒即ち *Kashgar* の土民はArya, Turk, 西藏三種の混合にて決して單純のものにあらず。

前漢時代に於て *Tarim* 盆地の南境及び西界に西藏種の民族住居せりとせば、此盆地の南邊、南山脈の北麓に據れる城廓諸國の土民に此種類の混入あるべしとは、何人も期待する所なるべし。既に前にも述べたる如く、*Joyce* 氏が和闐の人種を研究したる所によれば、此土民の骨格に西藏種の存在せるを認めたり。而して上代に於て此關係は尙顯著なりしと見え、魏書^{卷百}の西域傳及び通典^{卷百九}于闐の條に「自高昌以西諸國人多深目高鼻唯此一國貌不甚胡頗類華夏」と記せり。當時の于闐人の容貌が深目高鼻ならずして、還て華夏に類似せるは、漢人が此地に移住せしならんと見るべきのものに非ずして、實は漢人に類似せる西藏人の混合せる結果に歸すべきなり。*Stein* 氏が和闐の *Niya* にて發見せる *Kharosthi* 文字の古文書には印度語にもあらず、Iran語にもあらず、將た又Turk語にもあらずして、還て西藏語系に屬すべき言語の多く使用せらるゝを見る。而して此等の言語の中には日常の生話と密接の關係を有するものもあれば、此の言語の嘗て和闐地方に於いて、一般に使用せられたるものならずんばあらず。又 *Dandāniling* 及び *Eudene* にて發見せられたる古文書及び刻文には未

知の言語にて書かれたるものあり。Hoernle 氏の研究する所によれば、此言語は Turk 語或は蒙古語様のものにあらざして、寧ろ單綴音の西藏語に擬すべきものなりといふ。(Stein, Ancient Khotan, pp. 149-150) 此の如く和闐地方に於いて上代に西藏語の行はれたる形跡の存するは、余輩が漢書の西域傳を考察して得たる一般の傾向と脛合するものなり。Grenard 氏に據れば和闐の東今の *Kenia* に該當する唐代の娑摩城の名は西藏語 *pye-ma* の對音にて沙の義なり、又漢代の且末、西域記の折摩馱那の折摩はまた同國語にて沙の義、馱那は *long* の訛にて市城の謂ならんとすへり (Mission de Dutreuil de Rhins, II, p. 54)。此の如く南山脈の北麓に位する西域南道の城郭諸國の名稱が西藏語にて解釋せらるゝとせば、此方面に於ける大國和闐の名稱も亦この國語に淵源を有するにあらざるなきか。和闐即 *Khotan* 國は漢代より近代に至るまで、漢土にては于闐と書かるゝが常なり。然るに獨り玄奘の西域記には之を瞿薩且那と書き、其注に「唐言地乳、即其俗之雅言也、俗語謂之渙那國、匈奴謂之于遁、諸胡謂之豎且、印度謂之屈丹、舊曰于闐訛也」と見えたり。玄奘の瞿薩且那が梵語 *Kusātana* の對音にて實に地乳の義なるは、既に *Reimst.* 及び *Chézy* 二氏の説ける所なり。蓋し此名は、梵語に附會したる雅名にして、于闐、屈丹、于遁、豎且等がその實名なること既に西人の認むる所なり。特に Stein 氏が和闐にて發掘せし *Kharoṣṭhī* 文書には之を *Khotana* 或は *Khodana* と書けりといへば、屈丹豎且即ち *Khotan* が元來の名稱にて、瞿薩且那即ち *Kusātana* は後世に成れる雅稱なりと知るべきなり。和闐を漢史に于闐或は于遁と書き、その現音は *Yü-tan* *Yü-tien* なれど、于の古音が

Khu' gu なるべしは前段に述べたるが如くなれば漢代に于闐と書きて Klu-ten' gu-ten' と音じ于闐と書きて Klu-ten' Gu-ten' と音ぜしならん。又之を漢那或は漢那と書くは中音の省かりたる略譯と知るべし。Bushell 氏の説によれば和闐は古より玉石の産地として有名なれば漢人が此國の名稱を音譯するに方りて特に玉(玉)石に因んで于闐(Yu-tien)と書けるならんと。Stein 氏は此説を奉ぜし様なれど、そは Chavannes 氏が説けるが如く于闐の二字は全然玉字と關係なきなり(Stein. Ancient Khotan. p. 155)。ちて于闐の漢字には玉の意なければど、此名稱は玉石に因める土言なるべし。西藏語にては玉石及び水晶を Sel(r)do としひ玉石を(r)do-nying (の義石)或は(é)yang-ti (の義幸)とすひ Turkois 石を(é)yu(yu)とす。而して Turkois 石と Nephtalith 玉とは往々にして混同せられ同名にて呼ばれることあり。例へば印度にて此二石を均しく Calliana と稱するの類是なり。(Tomasschek Kritik der ältesten Nachrichten über Skythischen Korden I. p. 750) 漢語にて玉石を gyok(yu)とすひ滿洲語にて之を gu とすひは西藏語の gyu(yu)と同語るなべければ漢人は玉石と共にその名稱をも西藏より輸入せしなるべし。而して于闐の于(Khu' gu)は西藏語 gyu(yu)の對音にて玉石の義なるべし。又此國語にては城邑村落を tong-Kira-nhi 語 Rünchenbung 語 Waling 語にて teng' Rodong 語にて thugma' Chhingfängya 語 Yakha 語 Lambichhong 語 Dunggali 語にて ten とすへば(Hunter. p. 163) 于闐の闐は此の言對音にて村落城邑の義なるべし。于闐國は古より玉石の産地として有名なれば其國を Kho-ten' Klu-ten' Gu-ten' 即ち玉城或玉邑と呼びしならん。玄奘の西域記に漢代の且末國を折摩駄那とすへるは Grenard 氏

の説けるが如く、*Cyema-tong* *Cyema-tan* 即ち沙城の義にて、干闥と比すべき名稱なり。

以上考證せる所によりて、*Tarim* 盆地の南邊に往昔西藏種の據れるを知るべきが余輩は更に西方の記録に徴して此推測の誤らざるを證せんと欲す。西方の學者の中にて西域の地理を稍精細に記録したるは、ギリシヤの地理學者 *Ptolemaeus* とす。同氏の地理書を案ずるに漢の葱嶺に當る *Imaos* 山脈の東に方りて *Serica* の國あり。此國の北界に連亘し漢の天山に當る *Arzacia* 山脈の南に *Issedon* *Seythia* といふ處あり又漢の南山脈に當る *Kaisa* 山脈の北に *Issedon* *Serica* といふ處あり。而してその東に *Issedon* 人の名を擧げたり。此國人の何人種たるは固より此書によりて知ること能はざれど此國が *Tarim* の盆地に在りしは確かなり。 *Issedon* 人を初めてギリシヤ人に紹介したるは *Aristeas* といふ詩人なりと。此人は紀元前六百五十五年頃に *Arinaspae* と題する詩を著し、その中に *Issedon* と稱する遼遠の國に遊べることを歌へり。此詩篇は多く散逸して今日に傳はれるは甚だ僅少なれば、之によりて *Issedon* 人の事情を窺ふこと能はざれど、*Byzantin* の學者 *Issees* が *Arinaspae* の詩を引用せる中に *Issedon* 人は垂れたる髪の毛の飾に輝きての一句あり。西藏の婦女は頭髮を背後に長く垂らして、之に眞珠玻璃象牙錢等を結び付けて粧飾とすれば *Issedon* の風俗は蓋し之を言へるものならん。又 *Herodotos* によれば *Issedon* 人は平和を好む人民なりといへば、此國民が水草を逐うて轉徙する游牧の民族にあらずして城郭を有し耕作商業に従事せし人民なりしを察すべし。氏はまた此國に行はれたる奇異の習慣を記して曰はく、此國の人父を失ふと

きは、その親戚縁者羊を牽き來り、之を屠りてその肉を細かに切り、然る後に主人の亡父を切斷し、其肉を羊の肉に和して饗應す。又頭の皮を剥ぎ去りて之を洗ひ淨め、之に金箔を施し、神聖のものとし大切に保存し、毎歲祭祀を行うて供養す」と。Tomasehek氏は東西の記録を博引旁證して、此等の風俗は大體に於いて西藏種類の間に行はれたるものと一致するを示し、以てIssedon人の西藏種なるべきを推測せり (Kritik der ältesten Nachrichten. I. pp. 737-757)。氏がIssedon人を以て西藏種と爲すは最も穩當なる意見にして、余輩は之に贊同するものなるが、氏が此民族を以て沙洲及び甘肅省の西部に據れる漢史の大月氏と考定せるには同意すること能はず。尤も氏が此推測に出でたる所以のものは、大月氏をKichthofenなどの如く亦西藏種と信せしが故なるべけれど、此民族が既にTurk種なるに一定せる以上、此見解は勢ひ變更せざるを得ず。前にも述べたる如く、Herodotosの言によれば、Issedon人は平和を好む人民なりといへば、その土着の民にして商賣農業に従事せしは察するに難からず。之を以て游牧の大月氏と比較するは、全くその當を失したるものなり。想ふに此IssedonはPtolemaeusの地理書に記されたるが如く、Faria盆地の中、殊に南山脈の北麓に據りし西藏種の城郭國なりしなり。東方亞細亞民族の中獨り此國人が紀元前七世紀の太古に於いてギリシヤ人に知られたるも畢竟漢と西域との交通の衝道に當り、而も商業に従事したる民族なりしが故なるべし。

以上陳述せる所によりて之を考察するに、往昔Faria盆地の南邊に西藏種の據れるは、此

民族の本地が南山脈以南に在りしが故なるべく又此盆地の北邊に Turk 種の住せるは此民族の本地が天山脈以北に在りしが故なるべし。之を要するに此盆地は Arya Turk 西藏三人種の接觸交又せし處なれど Turk 種と西藏種との間には廣漠たる流沙の横はるを以て、上代に於いては互に混合するは困難なりけんが、Arya 種の根據地は葱嶺に在りしを以て、此人種が盆地の南北に蔓延するは比較的容易なりしなり。故に此盆地の南部に於いて西藏種の外に他人種の混合ありきとせば、そは Turk 種にあらずして Arya 種なりしなるべく、又その北部に於いて Turk 人の外に他の民族住居せしことありとせば、そは西藏種族にあらずして Arya 種に屬する Iran 人なりしなるべし。此の如く此の盆地に於ける上代の人種關係を考察し來れば Turk 種に屬する大月氏の故地が和闐の東四五十里の處に在りしとは思はれず。故に大月氏と都貨邏とが果して同一民族の異稱ならんには、西域記に和闐の東を以て都貨邏の故國となすは信じ難し。若しまた玄奘の此言に全く誤謬なしとせば、大月氏は到底都貨邏と同一の民族たること能はざるなり。近時 Marguât 及び Franke の二氏は大月氏と Tokh-Ara とが別個の民族なりしを主張せり。余輩は此兩大家の所説に對して批評を試むるに方りて、先づその大要を裁録すべし。

Marguât 氏曰はく、史記漢書に見えたる大夏國の名は西方の記録に現はる、Tokhāra の對音にして、而もその略譯なるべし。Strabon によれば、Jaxartes 河の背後より南下して Bactria 國を顛覆せしは Saka 種に屬する *Adon, Itabunor, Toyapoi, Zakrapanvor* の四民族なりとす。Trogas

Pompeius の Asian 王は Tokhara の地に王となり Sakarank を滅せりとあれば Strabon の Παδαροι は Trogas の Asian にて又漢史の月氏なるべし。月氏 (Yüeh) の月字は元と get'gat と音じたれば Strabon の Παδαροι は Padaroi の誤寫にて Ariois は更にその轉訛なるべく又 Ptolemaeus に Tarioi とあるも同名なるべし。Strabon 及び Ptolemaeus の記す所によれば Tokhara 人は Pararoi (月氏) と共に Jaxartes 河のあたりより南下し Sogd を經て Bactria に侵入せる如くに見ゆれど漢土の記録に徴するにその必しも然らざりしを證するものありとて西域記が瞿薩旦那 (Khotan) の東方に在りとせる例の都貨邏の故國に關する記事を引用しとて曰はく此文面によれば Tokhara はその故國たる今の Takla Mahan に住せし頃より既に繁華の都會を有しその東隣大月氏の游牧民とは大に生活の状態を異にせり。されば此二民族が西方に移轉するに及んでも大月氏は依然として行國なるに反して大夏は城郭を有せる土着の民たりしなり。想ふに Tokhara は Takla Mahan より西方に進み葱嶺を越えて Bactria に遷りしなるべければ Jaxartes 河の方面より彼地に侵入せる大月氏とは全くその徑路を異にせるなり。然れども大夏即ち Tokhara は後に至りて大月氏と共に混合融和して一國民となりしなりと。(Erdmann, p. 206f.) Franke 氏は更に此説に訂正を加へて曰はく Margart 氏は漢史の月氏が西史の Asiani Asioid Pasiaroi と音聲の類似するを理由として之を同一民族と考定したれど如何にや。特に Παδαροιを Padaroi と讀めるが如きは既に證明を經たる者にあらずして新に證明を要すべきものなり。尤も Ptolemaeus の Tarioi が果して Ariois の轉訛ならんには此等の名稱は共に月氏の

名と著しき音聲の類似あり。而して此等の民族の移遷せし道程に就いては余輩は Marquart 氏と全く異なる考察を有す。玄奘が Khotan の東方に於いて都貨邏の故國を發見せるは最も重要な事實なり。何となれば此の都貨邏はギリシヤ人の建設せる Bactria 國を滅ぼしし Tokhara なればなり。漢代の支那人は Tarim の盆地に住せる Tokhara に就いては毫も知る所なかりしと見え、漢書の西域傳には玄奘の所謂都貨邏の故國に當る地域に於いて、渠勒戎廬扞彌等の小國を擧げたれど Tokhara の名を記さず。然れども此等の小國及び Khotan の東境は都貨邏の中に包含せられしなるべし。而して何故に Tokhara が此地を去りて西方に移りしか、又何故に此名は張騫に知られざりしかに就いては余輩に意見あり。想ふに月氏は匈奴の冒頓老上二單于の攻撃に遇ひて紀元前百七十年に天山に遁走せし時、都貨邏の故國を通過せしなるべければ、此民族はその住地の沙漠に侵蝕せらるゝを患ひ、月氏と共に天山の北に據れる塞種の地に侵入せしなるべし。而して月氏は都貨邏と共に塞種を南方に追ひ退け、暫時その地に留まりしが、烏孫の攻撃ありしを以て紀元百六十年頃にその屬民を率ゐて西方に移轉し、遂に Jaxartes、Oxus 二水の流域に伐ち入りしなり。此の如くに當時の事情を考察するときは、Sarboun は Asioi、Pasianoi、Tokharā、Sakaranle の四民族が Jaxartes 河の背後 Sakas の地より南下して、Bactria に侵入せりとある文面はよく了解せらるべし。Sarboun の Asioi、Pasianoi が果して漢の月氏なりしや否やは明かならざれど、漢史の大月氏が Sarboun 及び Togas の所謂 Tokhara と共に同一團體を爲し、ことは亦疑を容れず。故に紀元二世紀に生存せ

し Ptolemæus が Bactria の大民族を Tokhāra と呼べるに、後漢書は之を大月氏と稱せり。之を要するに Tokhāra と大月氏とが結局共に融合して一民族となりしは、Maquart の説けるが如しと (Zur Kenntnis der Türkvölker und Skythen Zentralasiens, p. 24 f.)。以上二氏の論旨を考察するに Tokhāra 及び大月氏の移遷の順路に就いては見解を異にすれど、Tokhāra の本源地が和闐の東 Takla Mahan の地にありしこと及び此の民族が大月氏と融合して同一國民と成れることに就いては、全然その説を同じうす。而して此議論の典據とする所は、共に専ら玄奘の西域記の文にあり。然れども玄奘が都貨邏の故國として擧げたる彼の記事は、此の如くに了解し、又此の如く信據するに足るべきものなりや否や。西域記に都貨邏の故地として記されるは、彼の一處に止まらず、此の外尙ほ安阻羅縛國 (Andorab) 閩悉多國 (Xosá) 營健國 (Mungian) 阿利尼國 (Arlian) 曷羅胡國 (Rawan) 訖栗瑟摩國 (Kism) 鉢利曷國 (Pargar) 嚩摩阻羅國 (Hemakala) 鉢鐸創那國 (Budaksan) 淫薄健國 (Yambaken) 屈浪鞞國 (Kunna) 淫摩悉鐵帝國 (Dara-i-Mastin) の十二國の條にも亦之を都貨邏故地といへり。たゞ此處に都貨邏故地とあるを彼處に都貨邏故國とあり、又此故地の十二國は南北朝より隋代まで吐呼羅或は吐火羅といはれし地域に包含せられたるに、その故國たる都貨邏が Takla Mahan に位して吐火羅國の外にありしを異れりとす。然れども西域記に故地といひ、又故國といふは、單に行文上の便宜によりてその文字を換へたるまでにて、敢てその意義に差異ありと思はれず。故に此の文によりて Takla Mahan を都貨邏の本地と主張することを得ば、また同時に吐火羅の十二國をもその根源地とも見做し得

べし。泰西の學者は西方の記録によりて、Tokharis 民族が東方より來りて Bactria 國に移住せし歴史上の事實を知れるを以つて、只管その本源地を東方に探らんとする欲望あり、之が爲めに西域記に載せる都貨邏の故地東西二處の中東方の都貨邏をその本地と考定して之を疑はされど、此の如きは果して西域記の文意を得たるものなりや否や。余輩を以つて之を觀るに漢人が某國の故地或は故國と稱するはその國民の根源發祥地を指すに非ずして、往昔その名にて知られたる國土をいふなり。例へば唐書^{卷二百十九}渤海國の條に肅慎故地爲上京、獯貊故地爲東京、高麗故地爲西京、扶餘故地爲扶餘府、沃沮故地爲南京とあるが如き即ち是なり。肅慎、獯貊、高麗、扶餘、沃沮の名は漢土の古記に見えて、當時には現存せざれど、その地が各々渤海の上京、東京、西京、扶餘府、南京に該當するは知られたる事實なるが故に、之を故地とは謂ふあり。故に西域記に都貨邏故地、唐書に吐火羅故地とあるは、隋の時までは此國は正しく此名に知られしが、唐代には既にその名の失せられたればなり。總て漢文に某國の故地とあるは説明語なれば、その國土の名稱、方位は既に漢人に知られたるを豫想せざるべからず。此の如くに漢人の所謂故地或は故國の意を解釋するときは、玄奘が葱嶺以西に位するかの十二國を都貨邏の故地といへるは、即ち此地方が嘗て漢人に都貨邏の名にて知られしものに該當するを説明せるに過ぎず。而して此地たるや正しく魏書の吐呼羅、隋書の吐火羅なれば、此場合に於ける玄奘の説明は全く正鵠を得たるものなり。然れども葱嶺の東方に位する *Takin Mahan* が吐火羅と呼ばれたること史乘に證據なければ、玄奘が此地を以て都貨邏

故國となし、は、全く杜撰なりと謂はざるべからず。今日の東洋學者は東西の記録を對照比較して、或は西史の Tokhāra は漢史の大月氏なりといひ、或は此二民族は同一にして、共に東方より來りて Bactria を占領せりなど、論ずれど、唐代に生れたる玄奘法師は如何てか此の如き上代の事實を究めんや。彼の所謂都貨邏は即ち魏書の吐呼羅、隋書の吐火羅にして、此民族の東方より移轉せしや否やは、彼の問ふ所にあらざりしなり。西域記にいふ故國、故地の意義既に此の如しとせば、Richthofen 氏が此文によつて、大月氏の本地を Falia Mahan とし、又 Margnat-Franke の二氏が之によりて Tokhāra 民族の移遷せし次第を推測したるは、共にその根據を失へるものと謂ふべし。

和闐の東南山の北 Falia Mahan が既に Tokhāra の本源地にあらずとせば、そは果して何處に求むべきか。都貨邏の異譯吐呼羅の名が漢史に見えたるは、魏書の西域傳を以て始とす。然れども隋書^{卷三十五}及び高僧傳^{卷一}によれば、紀元三百八十五年に長安に來りて譯經に従事せし曇摩難提 (Dharmas Nandin) は兜佉羅の人なり。兜佉羅は明に Tokhāra の音譯なれば、此國が漢人に知られたるは、東晋の末葉にあるべし。而して此兜佉羅は固より Tokhārestan なれば、Tokhāra 人の本源地は漢史の方面より直接に之を知ること能はず。然れども西方の古書に散見する Tokhāra の記事を以て、之を漢土の記録に參照するときは、此民族の根源地は必しも推測し得られざるにあらず。Strabon の地理書には、Bactria 國が一時東方に略取せし領土の中に Phroun 及び Seres の名を擧げて、Tokhāra を記せられ、Dionysios de Periegetes は或る古書

に據りて、Sakaの背後に Tokhâra、Phroun、Seres の三國あるを記す。(Dutreni de Rhins, Mission Scientifique, II, p. 27) 考 Plinius は Attacoras (西藏) の背後 Seres の近傍に Tokhâra 及び Phroun を置けり。然て Seres は支那、Phroun は匈奴なれば、Tokhâra が此二國に接近せる處に存在せしは、亦言を待たれど、その的確なる方位に至りては、未だ明かならず。然るに Ptolemaeus の中央亞細亞の地理を見るに、支那の黄河に當る Bantises 河が西藏の高地を出て、北方に轉じたる處、及び南山脈に當る Kasia 山脈の東端に位する Thagour 山脈の東麓に Thagour 人の名を擧げ、Bantises 河の東岸に Thagoura 城の名を記せり。この Thagoura を Yule 氏、Grigorieff 氏は Thagurn に作らば Grenarad、Richtofen 氏は Thagura と書けり。而して Richtofen 氏は此の Thagura を他の西史の Tokhâra と同一と見做し、之を和蘭の東 Takla Mahan の地に當てたり。Tomasehek 氏は Thagur を以て Tokhâra にあらずとなし、之を今の涼州即ち漢代の武威郡、Arabia 人の Kutza に擬し、その名は此地に流るゝ大河といふ川に起れりとして、その理由を述べて曰はく、支那語にては大を da といひ、河を ho といふ。而して蒙古語にては河を shol といふは漢語にても元は河を chor といひしなるべし。故に大河とかきて da-chor と音じ、Thagur はその對音なるべしと (Kritik der ältesten Nachrichten über den skythischen Norden I, p. 743) Grenard 氏は Thagoura を今の蘭州と云じ (Mission scientifique, II, 27 Note 2) Hermann 氏は之を甘州に當たり。(Seidenstrassen) Ptolemaeus の Thagura の位置に就いては、此の如く泰西の學者の間に見解を異にすれども、而も之を漢史に參照するときは、その方位は略々推測し得らるゝ如し。

Ptolemaeus の地理書に見えたる Thagoura 人が漢人の所謂河西の地に住せるは、何人も之を拒否すること能はざるべし。之を漢史に徴するに、大月氏及び烏孫はもと燉煌祁連の間に往せり。燉煌は今の沙州、祁連は今の甘州の西南に在る山なれば、此二民族は漢書の文面によれば、甘州より沙州に至る地域に住せる譯なれど、これは單にその住地の大略を言へるにて、實は黄河より以西沙州に至る甘肅省の地に住せるなり。十三州志によれば、大月氏は西平(今の張掖、今の甘州)に據れりとあり。又讀史方輿紀要卷六十三、陝西五十二涼州衛姑臧廢縣の條に、西河舊事、姑臧城秦月氏戎所據、匈奴謂之蓋臧城、語訛爲姑臧也とあれば、大月氏の領土が涼州をも包轄し、東黄河に達せしを知るべし。而して涼州が河西の地に於いて最も形勝殷富の區域たるは、讀史方輿紀要の同處に、衛山川險阨、土田沃饒、自漢開河西、姑臧嘗爲都、爲魏晉建州鎮、張軌以後恒以一隅之地、爭逐於群雄間、魏太武、曩滅北涼、勅太子晃曰、姑臧城東西二門外湧泉、合於城北、其大如河、自餘溝渠流入漠中、其間乃無燥地、五代史唐之盛時、河西隴右三十三州、涼州最大、土沃物繁、而人富樂、其地宜馬、唐置八監、牧馬三十萬匹、漢班固所稱涼州之畜爲天下饒是也、西夏得涼州、故能以其物力侵擾關中、大爲宋患、然則涼州不特河西之根本、實秦隴之襟要矣とあるに徴して之を知るべし。されば河西に雄長を稱せし月氏が、此方面に主力を置き、以てその西方を命令せしを察するに難からず。此の如く漢代に於ける河西の事情を考察し來れば、Ptolemaeus の Thagoura は明かに漢史の月氏に該當すれば、Richthofen 氏が大月氏を西史の Tok-hara と考定したるは、全くその正鵠を得たるものなり。但し氏が Ptolemaeus の Thagoura を河

西に置かずして、之を和闐の東 *Taka Mahan* に當てたるは、西域記の文に誤られたるなり。

既に月氏の主力が河西の東部に在りて、而も此方面に於ける重要な樞區は、今の涼州即ち漢代の武威郡治姑臧城なりとせば、月氏の異稱たる *Thegour* 國の都城は、蓋し此地にありしなるべし。前段に引用せる西河舊事の文に、姑臧城は匈奴の蓋臧城なりしといへば、武威郡の治所姑臧縣の名は匈奴の故稱を襲へるにて、漢人の命名に係りしものにあらざるべし。而して此地は秦の時に月氏戎の據れる處なりしといへば、匈奴の蓋臧縣は元來月氏の建設にて、匈奴は亦その故名を存せしにあらざるなきか。Arzobisの學者 *Ihsai* の書中に見えたる *Kudza* の姑臧たるは疑なければ、此地は *Kuza* とも *Kudzan* とも呼ばれしなり。此の如く姑臧の稱呼に兩様ありしは、宛も大月氏の貴霜翕侯がその都城護燥と同名なるが如く、庫車 (*Kucha*) が漢史に多く龜茲屈支と書かれたるに、梵語雜名に俱支婁とあり、Arabia 人の記録に *Kusan* とあるが如く、又今の *Turfan* を漢代に姑師、車師といへるを後漢より唐代に亘りて之を高昌と呼べるが如きものならん。此の如く一語の末尾に *n* 音の有無が語根に何等の變化を與へざるは、*Alai* 語に普通なる現象にて、例へば蒙古語にて月を *sara* とも *sara-n* ともいひ、滿洲語にて七を *nada* とも *nada-n* ともいひ、*Turk* 語にて兄を *aga* とも *aga-n* ともいふが如き是なり。此を以て之を察するに、如上の諸稱は *Alai* 語系に屬し、而もその中の *Turk* 語なるべし。*Turfan* の古稱たる姑師、高昌、*Kucha* の古稱たる龜茲、俱支婁、*Kusan* が涼州の古稱たる *Kudza*、姑臧、蓋臧と同語なりや否やに於いては、今遽かに之を斷言し難しと雖も、大月氏

の護燥、貴霜は上の *Kudza*、姑臧、蓋臧と同語なるべし。且つまた月氏の二字官話音にて *tu-tsi* と音ずれど、その古音は *ngwet-si' ngat-si' gwat-si' gwet-si'* なれば、此國號も蓋しまだ涼洲の古稱蓋臧、姑臧と同名にて、*Arabia* 人の *Kudza* と均しく、語尾に *n* 音の省かれたる形なりと知るべし。又更に察するに、匈奴が月氏を逐ひ攘ひて河西の地を併合するや、その地に渾邪、休屠の二王を封じたり。而して休屠王の封土が涼州にありしは、漢書地理志武威郡(涼州の今)の條に、故匈奴休屠王地武帝太初四年開莽曰張掖、師古曰、休音許、蚘反、屠音直、閭反とあるにて知るべし。休屠の二字今は *Hu-t'u* と音ずれども、古音の *kin-tai kin-so* なるべきは、前顯顏師古の音註及び國字音に徴して察すべし。因て想ふに休屠は姑臧、蓋臧と同名にて、月氏の地に封ぜられたるが故に、その名を得たるならん。人或は漢の武威郡の中に姑臧、休屠二縣の名あるの故を以て、余輩のこの説に疑惑を懐くことあらんが、姑臧縣の名は匈奴の蓋臧城に依り休屠縣の名は匈奴の休屠王の名に依りたるが故にて、深く語源を究めて定めたるものにあらず。

以上の考證によりて河西の東部今の涼州の地が月氏の要區たるのみならず、月氏の名もその古稱姑臧に起れるを知り得たれば、*Ptolemaeus* の *Thagoura Thogara* が漢史の月氏なること及び西史の *Tokhara* が *Ptolemaeus* の *Thagour* なるは、亦争ふべからざるべし。*Ptolemaeus* はこの *Thagour* より以東 *Sera Metropolis* に至る間にたゞ *Daxata* とすふ一個處を擧げたり。此の *Daxata* が何地に當るべきかに就いては、種々考定を異にすれど、*Tomaschek* が之を今の蘭州に擬したるを正とすべし。又 *Sera Metropolis* に就いて *Gerrin* は之を後漢の都洛陽に當てた

れど、長安が Saragh と稱せられしは、景教の碑文にも見えなれば、Richtofen の説に従て之を長安と見るを穩當とす。然らば何が故に Ptolemaeus の地理に於いて Bantios 河即ち黄河以西に數多の地名を擧げたるに、Serice の本地に於いて Sera Metropolis の外に獨り Daxaxa の一城と記すに止まりしが。想ふに西域より漢の都城に至らんとするときは、その頃の金城即ち蘭州府にて嚴密なる檢閲を受けたりけんが故に、外域の商人は漢土の門戸に接近する姑臧にて絹を買ひ入れて直に引き返へし、親しく長安に至りしもの甚だ尠かりしが故ならん。Ptolemaeus の地理書が漢國に隸屬せる河西、西域の地理に精しく、遠てその本國に粗なりしは、蓋し之が爲ならん。

Ptolemaeus には支那及びその屬國たる河西、河首、西域の地を Seres 或は Serice とし、その都長安を Sera Metropolis とす。景教の碑文に長安を Saragh と記したれば、之と同語なる Serice の名が長安より起りしは明かなり。而してギリシヤ語にて絹を ser とし、波斯語にて saragh sarah とし、Armenia 語にて seram とし、は支那を Sera Serice Saragh などと稱するは此國に絹を産するが故なり。而してこの Sera Serice の語源に就いて Richtofen 氏の説明を聞くに支那にては絹を常には su とす、と時には之をまた su-oir (糸兒) とし、Sera は蓋し此言の轉訛ならんと (China. I. p. 443. Ann. 2)。然れども兒字が oih と發音するに至りしは、五代より以後のことに屬し、その以前には絶えて無かりし音なれば、氏の解釋は全く正鵠を失へるものなり。Pausanias は Seres 國の事を叙し、此國にはギリシヤ人が ser と呼ぶ蟲あり、

Seres 人は之を *sér* とは言はず、全く之と異なる名にて呼ぶとすべし。されば *sér* の名が漢語にあらざして外國語なりしは、ギリシヤ人の既に認むる所なりしなり。Klaproth 氏の言によれば、蒙古語にて絹を *sighek* 滿洲語にて *sighe* 朝鮮語にて *sir* とすべしとあれば (*Mémoires relatifs à l'Asie*, II, p.265) *sera* *serice* は此等の *Altai* 語に淵源せしなるべく、而して波斯語にて絹を *saragh sarali* Armenia 語にて *seran* ギリシヤ語にて *sér* とすべし、*Altai* 語系の *sighe sighek* などの轉傳せしものと見るべし。然らば此等の *sighe sighek* の元義は如何と尋ねるに、蒙古語にては黄を *sira sera* とすべし、微黄色を *siraxan sirghan sirgha saragha* とすべし、紫色を *sigha* とすべし、絹の *sighek* は蓋し此言の轉にて、生糸の黄色を帯びたるものあるによりて、その名を得たるなるべし。若しも此考察を正しとすれば、*Serice Saragh* の名は蒙古語を骨子とせる匈奴語の西域に傳はりしか、但しは大月氏を介して彼地に渡りしなるべし。西域諸國が支那を呼ぶに *Sera Serice* 二様の稱呼あるは、語源を究むるに方りて、大に注目すべきことなり。而して景教の碑文に長安を *Saragh* とすべし、波斯が絹を呼ぶ名と全く同語なり。想ふに *saragh* は此言の原形に近きものにて、ギリシヤ人が之れを *serice (serice) serika* と稱し、母音 *o, a* を末尾に附するは、自國語に同化せしめたる結果なるべし。Turk 語にては黄を *sari* とし、*sarigh* ともいひて、その意義に何等の差異なし。然るに蒙古語にて *sira sera* とすべし、全く Turk 語の *sari* と同語なれど、此語にて *sigha saragha* とすべし、微黄の義となりて、Turk 語の *sarigh* とは異れり。既に Turk 語に黄を *sira* に *sari sarigh* の二語あるを考へ、又支那國を呼ぶに *Sera*

Sargh の二稱あるを思へば、吾人は此間に最も密接なる言語上の關係あるを認めずんばあらず。今 Turk 語にて相を *masit* としひて *sargh* と云はざるは古語の失せたるなるべし。Sär の名は *Nearchos* の書けるものの中に現はるとしひて (*Richthofen, China, I. p. 443*) 此名のキリシヤ人に傳はりしは、既に少くとも紀元前四世紀にありしといふを得べし。而して當時支那と西域との交通の要衝に當れる河西の地に如何なる民族が據れりしか。余輩は漢土の古記録によりて、此方面の状態を一瞥せんと欲す。

河西、河首の方面が漢人に知られしことの上代にありしは、此地方が禹貢九州の中雍州に屬せしにて知るべし。禹貢は雍州の境域を叙し、黒水西河惟雍州といへり。西河とは河水の山西と陝西との間を流るゝ邊をいひし名なれば、雍州の東界をいひしなり。黒水に關しては古來學者の間に議論ありて禹貢の釋名中に於いて最も難解の問題に屬せり。然れども此河水は禹貢の他處に導黒水至于三危、入于南海と見ゆれば、その雍州の西境を爲し、は確かなり。今嘉峪關外より西流し沙州を経て *Kara Nôr* に注ぐ河を *Batumgir* といふ。 *Batumgir* とは蒙古語にて渾濁の義なれば、之を漢語に譯すれば渾河とも黒水ともいふべく、蒙古語にて亦 *Kara usû* Turk 語にて *Karasu* ともいふべき名なり。想ふに禹貢の黒水は此の *Batumgir* 河なるべし。 *Batumgir* 河の注入する湖水は *Kara nôr* (黒湖) なれば、黒水の流入せし南海はこの湖水ならざるべからず。南海が印度洋にあらざるは勿論なれば、南海の南は漢語にあらざして、土言の對音なりしやも知るべからず。又禹貢が禹域の四至を叙したる處に、東漸于

海西被子流沙朔南暨聲教訖于四海とあれば、流沙が禹域の西境即ち雍州の西境を爲ししは明かなり。流沙の事はまた禹貢に、導弱水、至于合黎、餘波入于流沙と見ゆ。弱水が今の *El-Jana* 河なるは既に學界の定説なれば、流沙は甘肅省の西北方に連る沙漠をいへるなり。此の如く禹貢の雍州の範圍を考究し來れば、此州の西部は河西より敦煌に亘る地域にして、秦漢時代に月氏の據れる處なり。

黄河の上流域に關する禹貢の地理は稍、明瞭を缺けど、積石の邊までは雍州の中に屬せしなり。積石の方位に就いても古來議論區々なれど、漢書西域傳鹽澤の處に、皆以爲潛行地下、南出於積石爲中國河云とあれば、積石が假令實際の河源にあらずとするも、その河首に接近せる處たるべきは、察するに難からず。漢土の學者多く積石山を以て今の阿木奈瑪勒占木遜山に擬す。蓋し正鶴を失はざる見解なるべし。禹貢はまた雍州に隸屬せる西戎の三種を擧げて、織皮、崑崙、析支、渠搜、西戎即叙と云へり。而して此の中析支戎が積石山の附近即ち河曲に住せるは、水經注に、河水重源又發西塞之外、出于積石之山、中畧禹貢所謂導河自積石也、河水屈而東北流、逕析支之地、是爲河曲矣とあり、又蒙古游牧地卷十二青海和碩特部の注に、應劭曰、禹貢析支屬雍州、在河關之西、東去河關千餘里、羌人所居、謂之河曲羌、董祐誠曰、今河水繞阿木奈瑪勒占木遜山東而西、逕蒙古和碩特前頭旗土爾扈特南前旗南又西北流、逕河曲中爲和碩特前頭旗、南左翼中旗、南右翼中旗、土爾扈特南前旗及察漢諾門罕喇嘛遊牧處、即析支地也とあるに徴すべし。析支の名は後漢時代まで傳はりしと見え、後漢書卷七西羌傳に、西羌之本

出自三苗、姜、姓之別也。其國近南岳、及舜流四凶、徒之三危、河關之西南、羌地是也。濱於賜支、至乎河首、綿地千里、賜支者、禹貢所謂析支者也。と記せり。又杜氏通典九卷一百黨項の條に、黨項羌在古析支之地、漢、西羌之別種とあれば、禹貢の析支は漢の西羌、隋唐の黨項に比すべき西藏種なり。禹貢の崑崙は山の名にあらずして、析支の如く亦民族の名稱なり。此戎の雍州に隸屬せしこと、禹貢の文にて知るべければ、その住地は河西を去ること遠らざる處にありしなり。漢書地理志を案ずるに、金城郡の屬縣臨羌縣の注に、西北至塞外、有西王母僊海鹽池、北則湟水所出、東至允吾、入河西、有須抵池、有弱水、崑崙山、莽曰鹽羌、師古曰闕闕云、西有畢和羌、即獻王莽地爲西海郡者也、と見えたり。此文によりて、崑崙が臨羌縣即今の西寧の附近に在りしは推測すべけれど、その的確なる方位は未だ明かならず。然れども、崑崙は常に西王母と連結して記さるゝが故に、先づこの西王母の方位を考究して、而して後、崑崙の地を推定すべし。爾雅釋名を案ずるに、觚竹、北戸、西王母、日下謂之四荒とあれば、西王母は元と中夏の極西に接近せる國土、或は民族の名なりしなり。然るに戰國時代より西王母は既に西方日沒處に住せし神仙と化せり。故に莊子は西王母が仙女となりて道を得たるを記して、西王母得之、座乎小廣、莫知其始、莫知其終とあり、列子に、遂賓于西王母、觴于瑤池之上、西王母爲五謠、五和之、其辭哀焉、といひ、竹書紀年、周の穆王の條に、十七年、西征崑崙、兵見西王母とあり、山海經の西山經に、玉山是西王母所居也、西王母其狀如人、豹尾、虎齒、而善嘯、蓬髮、戴勝、是司天之屬、及五殘とあり、此外穆天子傳に、周の穆王が西征して西王母の所に至りしことの記されたるは、よく人の知る所

なり。さて河水の上流域に於いて國家を爲し得べき地は、上に述べたる析支河曲を描いては青海の附近なるべし。南北朝の頃より宋代に亘りて吐谷渾が青海に據り、隋唐の頃より黨項と相對峙せしは、此方面の形勢を示すものなり。而して禹貢時代に黨項の地に當る河曲に析支戒據れりとせば、吐谷渾の地に當る青海の地に如何なる民族の據れりしか。想ふに此民族は禹貢の崑崙にして、後の西王母なるべし。今青海を蒙古語にて *Koko hör* とし、西藏語にて之を *tso-ngongbo* とし、亦青海或は藍海の義なり (Sven Hedin. Die geographisch wissenschaftlichen Ergebnisse. Tafel V.)。西藏語にて湖水を *teo* とし、青藍を *ngongbo* とし、而して此 *ngongfo* を口語にては、*ongbo* 或は *wongbo* と發音す (五體詩文鑑 Klaproth. A. P. p. 34 a.)。因て案ずるに、西王母母の廣東音 (*wong*) の古音は *si-wong-do* なるべければ、西藏語青海を *tsu-tso-wong-do* 或は *tso-ong-do* の對音なるべし。又青海を僊海とすは、*tso-ong-do* の語尾 *do* を省ける *song* の訛なるべし。又青海の一名を卑禾羌海といふは、卑禾羌の住せしが故なれど、卑禾羌或は畢和羌の名は還て青海に起りしなり。西藏語にて淺藍色を *puk-gya* といふ。卑禾畢和は此言の對音なるべし。今青海に據る蒙古人を青海部と稱するが如く、又嘗て卑禾海(即ち *Puk-gya*) に據りし西藏人を卑禾羌と稱せしが如く、周時代に西王母海即ち *Tso-wong-do* に據れる氏羌を西王母と稱せしなり。此西王母は後世の吐谷渾の如く、西方は *Tsai-tam* の平原を領有し、南山脈を以て漢代の鄯善國と土壤を接せしなり。而して此方面の南山脈中に玉石を産せしは、漢書西域傳に鄯善國玉を出すとあるにて證すべければ、禹貢に雍

州の貢賦として球琳琅玕を擧げたるは、主として此西王母國より納めたるものなるべし。西王母の傳説に常に玉山或は崑崙山の現はるゝは、此歴史上の事實に淵源するものにて、禹貢の崑崙は西王母に外ならざるなり。但禹貢の崑崙はその名を南山脈に取り、他書の西王母は之を青海に取りしなり。此の如く考察し來れば、西王母は即ち今日の青海部に類する歴史上の人民なりしが、漢人がその土稱 *Tso-wangbo* を譯するに當りて、偶然にも西王母の三字を選びしかば、後世遂に之を陰位日沒處の神仙となし、之に配するに扶桑國を以てせり。扶桑が東王父と稱せられ、陽位日出處の神仙となりしは、蓋し之が爲めなり。

禹貢の析支が既に河曲に當り、崑崙が青海なりとせば、渠搜は果して那邊に求べきか。漢書の地理志を見るに朔方郡の屬縣に渠搜縣の名あり。讀史方輿紀要^{卷六}陝西の條に、渠搜城亦在廢夏州北、孔子曰、禹貢所云渠搜之戎、漢爲渠搜縣、屬朔方郡、中部都尉治此、後漢廢、後漢太和二年亦置渠搜縣、屬代郡と見えたり。唐の夏州は今の *Otes* の地なれば、周代に獫狁獯鬻の據りし處にして、北狄の住地なり。然るに禹貢の渠搜は西戎にて析支、崑崙と密邇せる民族なり。漢代朔方に設置せし縣に渠搜の名を冠せしは、史官の妄想にして、信據するに足らず。又隋書西域傳に今の *Fargana* に當る罽汗國を以て古の渠搜國となす。此考定の誤れるは、既に康居考に述べたり。想ふに黄河の西方附近の地にて國家を建設し得べき處は、河曲^青海の外にありては獨り河西あるのみ。故に南北朝の時に吐谷渾が青海に據れるに際して、匈奴の苗裔なりと稱せる沮渠氏は河西に命令せり。此を以て之を觀れば、禹貢の渠搜は明

かに河西に據れる民族にて、戰國末より漢史に見えたる月氏なるべし。月氏の名已に姑臧、蓋滅休屠、*Tarza* の異譯なりとせば、渠搜の名は尙一層此等の諸稱と類似するを認むべし。然れども渠搜の見えたるは禹貢にして、月氏の記されたるは史記なれば、卒爾に此説を聞かん者は、必ずその年代の懸絶せるに驚くべし。然れども余輩は禹貢の編作を以て春秋時代に在りと爲す論者にして、從來の學者の如く、之を支那開闢の太古に置かざるなり。此書の性質に就いては、嘗て「東亞之光」に於いて卑見を陳べたれば、今また之を説かざるべし。たゞ禹貢の編作を周以前に定むるときは、地理上の解釋に二個の支障あるを忘るべからず。即ち漢土の疆域は、周初は更にも云はず、春秋の初に至りても、尙黄河の流域を出でざるに、禹貢によれば禹域九州の中梁州、荊州、揚州、徐州の四州は楊子江の流域に屬し、又雍州の西部が河西、河曲を包容せるは、之を如何に解くべきか。Richthofen氏は漢族の本地を「*Tarim*」盆地の南部和闐方面に在りと爲し、禹の時は未だその移轉の時代を距ること甚だ遠からざりしを以て、禹貢が河西の地理に稍、精細なるは怪むに足らずといへり。此説明は或は雍州に對する余輩の疑問に答ふるを得べしとするも、楊子江の四州に向ては、亦之を適用すること能はざるなり。然れども余輩の説に従つて禹貢の編作を春秋時代にありとせば、此疑問は直に氷解せらるべし。此時代は即ち南蠻の一種、楚國が楊子江に蟠踞して、中原の諸侯を併呑せんとせし時代なり。此流域の地理が漢人に知悉せられたるは、全く之が爲なり。又此時代は戎狄が中國に侵入して、漢人と雜住し、華夏の風俗を變化して、被髮左衽の境たらしめんとし

たる時代なり。當時の漢人が河西河曲の地理を明かにするを得たりしは蓋し此等の外夷より傳聞せる所ならずんばあらず。禹貢の編作已に春秋時代にありしを考へ、又渠搜と共に記さるゝ析支の名が後漢時代まで保存せられしを思はば、余輩が此書に見えたる渠搜を以て戰國に現はれたる月氏と比較考定するも、敢て虚妄の言にあらざるべし。渠搜果して月氏なりとせば、Turk 種族は春秋時代に既に河西の地に據りて漢族の門戸に迫りしなり。而して此民族が何時の代如何なる處より此地に移轉し來れるか、文献の徵すべきものなければ亦之を知るに由なし。然れども月氏及びその隣族烏孫が匈奴に逐はれたるときに常に天山に遁れたるを以て之を察するに、此等の Turk 民族は之と此方面より河西の地域に侵入せしものならん。月氏の別稱 Thogara を西藏語にては Thogar とし、而して Turk 語の中 Gagakai 語及び Kirgiz 語にては伸張を togar とし、ひ Digur 語にては東方を togar とし、へば (Radloff Versuch. p. 1159. ab) Thogara (Thagura) は蓋し此 togar の轉訛にして東方の義ならん。Thogara をまた Tokhara 或は Tshara とし、ひ之を以て梵語寒冷氷雪の義となすは固より後世の附會にして原意を得たるものにあらず。月氏が何故に Thogar と稱せしかは全く不明なれど、Turk 民族の極東先哨隊が東方の號を標榜せしは、亦一奇と謂ふべし。